密宗安心教示章講義録

特36
173

017293-000-0

特36-173

密宗安心教示章講義録

服部　鑁海／著

M28. 6

ABE-0717

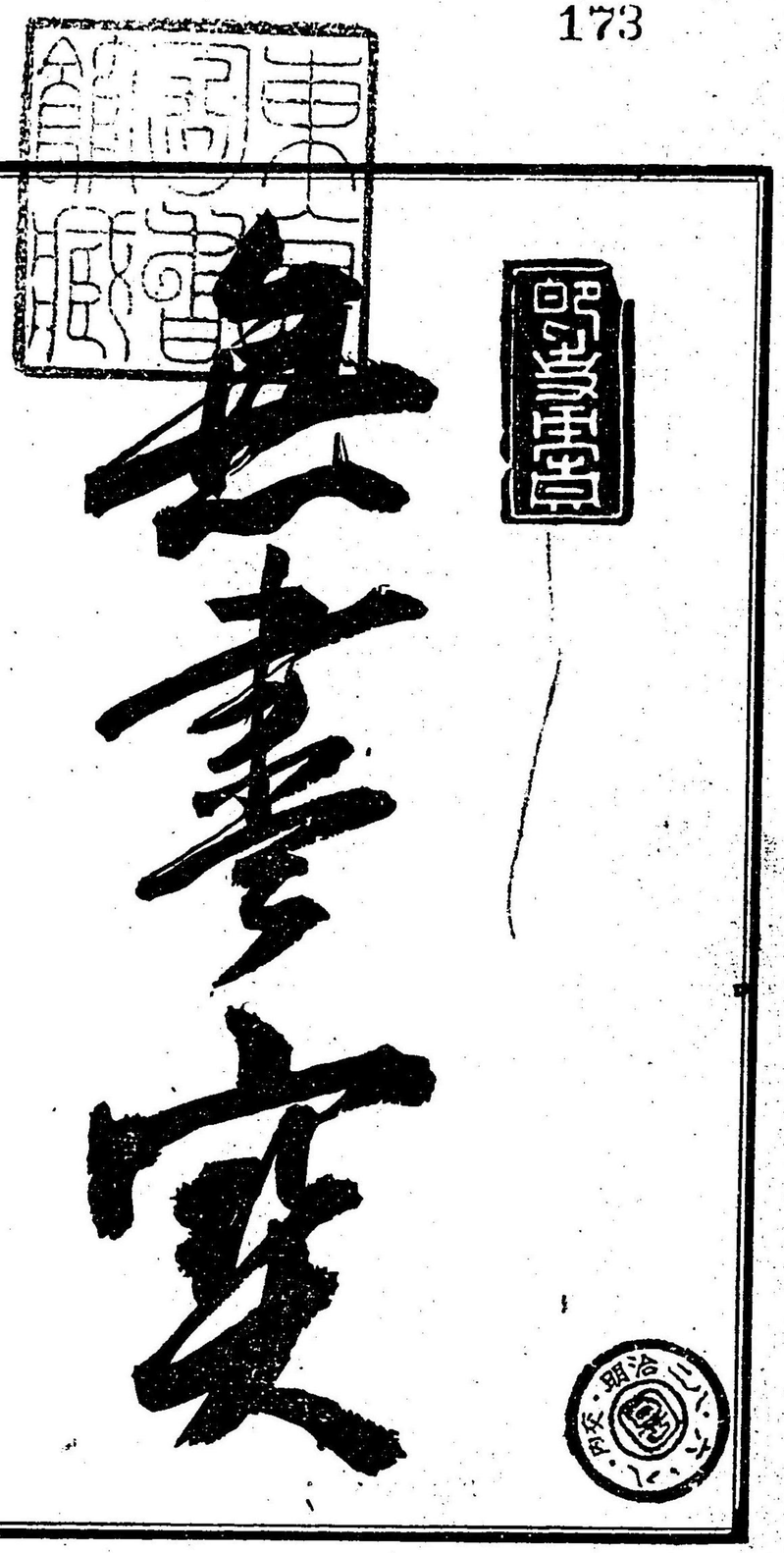
特36
173

孝實

題

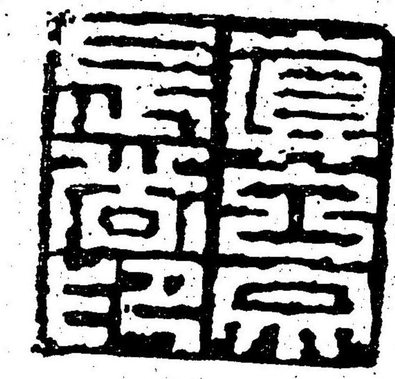
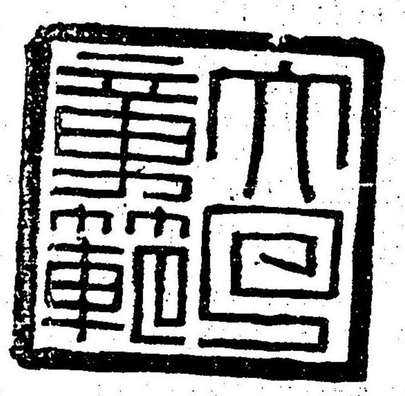
明治文庫

特36
173



妖書

明治文庫

昭和八年五月廿一日
真言宗
大僧正



密宗安心教示章講義錄

服部鏤海述

第一　本來胸中章

夫れ眞言密宗安心の至要を示さば

夫れは發端の詞にして。凡そ事を言はんとするとき。總體にかけて置く詞である。眞言とは眞は眞實言は言說にして。顯の四妄の言說を離れたる。如義言說の所說なるがゆへに眞言と云ふ。如義言說とは如は稱可の義にして。此言說は法性の實義に稱可して。眞實の功德法財を其儘に說き示し玉ふを云ふ。此義によるときは語密に限るに非ずして。身語意の三密を總じて眞言と名く。密宗とは具には祕密宗と云ふとにて。祕密は祕奧隱密にして。十地等覺の菩薩も見聞すると能はざる。三祕密の境界を云ふ。宗は主なり尊なりと釋して。我等の身心を托し尤も尊く專一に崇敬す

るに義を取る。安心とは安住の義にて心を居るとである。佛の心に等しく持つ。生佛一如の觀に我が心を居て。三密の妙行を修し一生に成佛を期するは。上根の安心である。佛の本誓に我が心を居て。誦呪の功力によつて順次往生を期するは。下根の安心である。安心の二字に此二意を含む。至要を示さばとは。上下二根に通じて。安心の至極肝要なることを。教へ示さばと云ふ意である

大日經王には如實知自心と說玉ひ

大日經王とは。両部大經の隨一にして本宗正所依の經である。經王と稱するとは。大日經第七卷に。我依大日經王說供養所資衆儀軌と。說き玉ふてあるに由る。如實知自心とは。立教開宗の正依安心歸着の骨目なれば。此五字を正所依として。高祖大師は十住心を建立して。大小權實一切の諸教を攝し盡し玉ふ。自心を知るに淺深重重ありと雖も。究竟じて眞實に自心を知るときは。心佛衆生是三無差別の境界に至る外はなひ。依て此經文を引證して。凡聖不二を宗旨の肝要とする。總安心の所依とす

高祖大師は。眞如非外。棄身何求と述玉へり

此は弘仁九年の春天下大疫の際。嵯峨天皇御親筆の般若心經を。高祖大師勅を奉じて御講讃のとき撰述し玉ふ。般若心經祕鍵の御文である。所引の文の上に。佛法非遙。心中卽近と述玉ふてある。佛法は智にして眞如は理なり。理と云ふも決して無相の空理を云ふに非ず。萬德攝持の理なれば。卽ち胎藏四重圓壇の曼荼羅を指して眞如と云ふ。抑金胎理智両部の曼荼羅は。行者色心の二法にして。色法を開ひては胎藏界の曼荼羅を建立し。心法を開ひては金剛界の曼荼羅を建立せしものなれば。両部曼荼の心數諸尊は。我等衆生の色心の二法を出でざるが故に。智に約しては心中卽近と云ひ。理に約しては棄身何求と釋し玉ふ。之を此章に引證

して。是れ亦凡聖不二を宗旨の肝要とする。總安心の所依とす
されば朝夕に妄念妄執にほだされ
さればとは。しかればと云ふに同じくして。過ぎ去りし事を受て
下を起す接續詞である。朝夕にとは。朝夕をあげて日夜のことを云
ひ。日夜について一期のことを顯す。妄念妄執にほだされとは。妄念
は當位につき。妄執は後位につくゆへ。心の內にあしき思ひの始
めて起りたるを妄念と云ひ。其心の二念三念と相續して移らず
替らぬを妄執と云ふ。ほだされは。物に繫がれて振り捨て難き心
を云ふ。眞字は伊勢物語に被絆とある
貪瞋邪見にまつはるる。有漏雜染の我等が胸中に
貪瞋邪見とは。貪欲瞋恚邪見の三毒にして。まつはるるとは。三毒
に纏縛せらるるを云ふ。有漏とは。漏無漏の差別は。煩惱の隨增不
隨增によると云ふが定義なれば。煩惱を隨順增長する法を有漏

と云ひ。之に反するを無漏と云ふ。漏には漏脫と漏失とあり。漏脫
は三業より過非を漏すを云ひ。漏失は善根を漏失するを云ふ
五智四身の德。一も闕るとなく。本來圓滿して備はれりと達悟する
五智とは。法界體性智。大圓鏡智。平等性智。妙觀察智。成所作智を云
ふ。五智一一の名義は。祕藏記に法界體性智者。謂三密差別數過刹
塵名之法界諸法所依故曰體也。法然不壞故名爲性。決斷分明得以
爲智。大圓鏡智者。謂自他三密無有邊際名之大也。具足不缺曰圓。實
智高懸萬像影現鏡之喩也。平等性智者。淸淨智水。不箭情非情。故彼
此同如。故當住不變。故名曰平等性智。妙觀察智者。五眼高臨邪正不
謬。因以爲名。成所作智者。二利應作。故曰所作。妙業必遂成之稱也と
釋し玉ふ。四身とは。自性受用變化等流の四種法身を云ふ。自性法
身は(自は自然自爾の義にして。性は不改に名く。法は軌持の義に
して。身には體依聚の三義あり)自性法界宮に在て。自性相應の機

に對して說法し玉ふを云ふ。受用變化等流の三身は。自性の境界に住しては。衆生益を得ると能はざる故に。三身の相貌を現じて隨他法界宮に出て。加持世界相應の機に對して說法利生し玉ふ。中に於て。十地の菩薩等の爲には報身を現じて說法す。是れ他に受用せらるる最初なるが故に。他受用身と名く。地前の菩薩二乘凡夫の爲に。三十二相の佛身を現じて說法するを。變化身と名く。威儀言音を六道九界の群生に等同流類して。遍く度せざるときを等流身と名く。已上の三身は何れも化他に約して名を得る。此五智四身にて。一切の佛德を攝し盡して。一も漏らすことなしと。かる廣大なる佛德を。我等衆生に少しも闕ることなく○雲晴れて。後の光りと。思ふなよ。本より空に。有明の月と云ふ御歌の如くに。妄雲晴れざる有漏雜染の我等が胸中に。本より備りあると開達解悟するを云ふ

是を凡聖不二の。宗要とす

如上は上下二根に通じて。總安心を示す文段である。迷悟の差別により六凡四聖と。大に十界の姿は替れども。其體性は實に三平等にして。一如なるを不二と云ふ。此凡聖不二と云ふが。尤も宗旨の肝要である。他門には現に在惡生死の凡夫なりと信機して。已が身を甚卑しむ教ありと雖も。吾宗は人々各々に凡聖不二の覺體を具備すと信機し。決して已が身を卑しみ厭ふことを教ざるなり。依て信機の分齊他と大に異なることを信知すべし。之を上下二根に通ずる安心の至要とす

但下根劣慧の者は。偏に此旨を信じて。更に疑はず。深く大日如來の。普門の誓願にすがり奉りて

已下は上下二根の別安心を明すに。上根の方を略して。唯下根の人の安心のみを示す。依て文の始に機類を簡擇して。但下根劣慧

の者はと云ふ。偏に此旨を信じてとは。此は近を指す辭にて。次上に是を凡聖不二の宗要とするとあるをさす。大日如來の御誓願は。彌陀の四十八願も。藥師の十二上願も。其他佛菩薩の誓願本誓を。悉く攝して洩し玉ふとなきゆゑに。普門の誓願と云ふ

一眞言に往生の信を決し。木樵り水汲む其間も。唯光明眞言を唱ふれば

一眞言にとは。何れの尊の眞言にも。一々に業障消滅。往生淨土の利益あるゆゑ。何れの眞言とも限らざれども。此は諸佛菩薩の總兜たる光明眞言を指して云ふ。往生の信を決しとは。光明眞言に信決定して唱ふれば。下根の吾等も往生淨土疑なしと諦信するを云ふ。光明眞言の儀軌に淨と不淨とを擇ばずとあるゆゑ。行住座臥に唱ふるも往生の正因となる旨を語を換て。木樵り水汲む其間も。と示してある

如來の本誓空しからざる故に。無始已來造り累ねし。煩惱罪障の黑暗も。五智圓滿の大光明に照されて。知らず識らず消滅し

如來の本誓とは。大日如來の本誓をさし。空しからざる故にとは。此眞言を唱ふれば。現世の願望も空しからずして成就し。未來の往生も空しからずして成就するを云ふ。無始已來造り累ねし煩惱罪障の黑暗も等とは。妙辟經に譬如室內久來有闇。若將燈入卽便暗滅。以念誦燈照罪障闇。悉得消滅。說玉ふてあるに由る。我等生の始を尋ぬるに無始にて。其無始なる過去遠々際より已來と云ふとを。無始已來と云ふ。無始已來造り累ねし煩惱罪障の黑暗も。明來暗去の道理ゆゑに。光明眞言を唱ふれば。五智の明燈によつて自然と消滅するを。知らず識らず消滅しと云ふ

婆婆の因緣未だ盡ざる內に。往生淨刹決定せりと。露ばかりも疑はざる

諦信決定して眞言を唱ふれば唱ふる聲の終るときに往生淨刹の業が決定するゆゑに○手に數珠のはなれぬ内に彼岸かなと云ふ句の如く假令有漏の依身は娑婆の此土にあるも早や淨土の分人なりと毫も疑はざるを云ふ

是を平生往生の眞言行者と申すべきなり

平生往生とは平生は臨終に對する言葉なるゆゑ存命の平生に未來往生の業因が成就するとにて臨終に至りて始て往生の業が定まるに非ざるを云ふなりとは決定のてにはにして事を確に云ひ定むるに用ゆる詞である

第二　密教大意章

つらつら眞言密教の大意を案ずるに

つらつらとは倩とも熟ともかきて熟は熟思にして深く靜かに思ふと云ふ意味である眞言密教とは前章に述るが如し大意とは大體の趣意と云ふとにて眞言密教の大宗を云ふ案ずるにとは眞言密宗の大意を考へみるにと云ふ義である

生佛自他の差別なく本初不生の心地に居し

生佛自他の差別なくとは生佛不二自他平等は吾宗の本意なるを云ひ本初不生の心地に居しとは吾等衆生は本より來た佛體と異なるとなき不生の德を備へ居ると諦信するを云ふ略付法傳に初者本初地者心地と釋し玉ふてあるゆゑに本初の初は本と同義にして本初は本來と云ふ意味である初を最初の義に取る可からず不生は生滅增減に移されざる諸佛の境界である此境界を生滅に移され居る凡夫の我等にも本來圓滿して闕くるとなしと云ふ處に心を居て動かぬを心地に居しと述てある

共に三平等の觀に住して深く凡聖不二の旨を信ずるを以て總じ

て安心の宗要とす

共に三平等の觀に住してとは利根なる者も鈍根なる者も共に心と佛と衆生との三は其體同一平等なりと觀念して疑はざるを云ひ深く凡聖不二の旨を信ずるを以てとは迷と悟との不同によつて相貌の上に凡夫と聖者との異はあれども本性は少しも變らぬ旨を深く諦信するを云ふ總じて安心の宗要とすとは利鈍の二機に通じて之を密宗安心の肝要とするとの意である

是故に高祖大師は醫眼所覩百毒變藥佛慧所照衆生卽佛と仰せられたり

此は高祖大師御製作の平城天皇灌頂文と云ふ書の中にある御辭にして耆婆扁鵲と云ふが如き名醫の眼より覩る時は如何なる百毒も咸性に應じて病を愈す効ある故に總べて妙藥に變ずる如く佛の知見より照し玉ふ時は迷ひの衆生も悉く上の三平等の覺體を備へし者なれば佛德を闕ぎし者は一もあるとなしとの仰せである

是れ則諸法平等にして本より生佛一味解脫の床に住すれども

是れ則とは上を受けて下に繼ぐ辭である諸法平等にしてとは諸法は一切法のことにして一切法は卽ち萬物のことである法は規則にて物は事物なれば一往法と物とは異なる如くなるも物は一々因果の規則によつて生じ物あれば法なきはなく法は必らず物に由て顯らはる是故に法も物も實は其體一なりと知りべし此萬物を見るに一々に差別し事々に相違すと雖も それは假相と云ふものにて萬物の體性より云ふときは此れは彼れを備へ彼れは此れに融し決して假相の如く實體に隔てはなひ之を諸法平等と云ふ本より生佛一味解脫の床に住すれどもとは上に教示のある如く心佛衆生の三は無差別なる故に素より一味

解脱の體である。解脱はときぬぐと云ふとで。一切の惡業煩惱は。少しも纏ひ穢すことなく。佛と同じく解脱たる無垢清淨の體性を。備へし我等なるぞとの御示しである。是以て高祖大師は。聲字實相義に。今以佛眼觀之。佛與衆生同住解脱之床。無此無彼無二平等不增不減周圓周圓と。御釋あらせられたり。語尾にどもとあるは。雖もの略語にて。意は生佛は素より一味であると雖もと抑へて。下の迷ひによつて。衆生が流轉する文を起す辭と作す

我等衆生は悟らざるが故に。隔歴妄執の我見に蔽はれて。長夜に苦を受く

隔歴妄執とは。平等一味の悟りに反對するものにて。根本無明を云ふ。根本無明は生死輪回の根本となる。衆生一念の迷ひより生ずる惡念を指す。生佛の間に隔歴を生し。諸法に不平等を見る。之を隔歴妄執と云ふ。隔歴妄執をば。守護經には不正思惟と說き。菩提心論には無始間隔と述玉ひ。瑜祇經には微細妄執と說き玉ふて。種々の名稱ありと雖も。何れも同體一惑にして。我他彼此と隔歴する惡念を云ふ。此隔歴の我見に蔽はるるによつて。一切衆生は生死長夜に苦を受るとの意である。生死長夜のとは。唯識論に未得眞覺恒處夢中故佛說爲生死長夜あるに依て知るべし

此衆生をして。悉く覺悟せしめんが爲に。佛みづから眞言密教を說き。群機に普應し玉ふなり

此衆生をして悉く覺悟せしめんが爲にとは。生死長夜に苦を受くる。一切衆生をして。殘りなく生佛同體の悟りを開らかしめんが爲なるを云ふ。佛みづから眞言密教を說きとは。大日如來の大悲深重より。萬機普益の眞言密教を說き玉ふを云ふ。群機に普應し玉ふなりとは。一機一益の教法にと替り。利鈍の二機に應じて。普く利益を與へんが爲めに。機教相應。教益甚深の法門を說き。我

等衆生を洩さず攝化し玉ふを云ふ

是故に此教に依る機は勝慧劣慧齊しく其益を蒙らずと云ふなし

是故にとは上に續ぐ詞である眞言密教によつて信修すれば上根勝慧の人は一生に即身成佛し下根劣慧の者は順次に往生淨土の益を蒙るとの旨を示す

是を以て興教大師は淺觀但信眞遊淨土深修圓智現證佛道述玉へり

此は上の文段の證據に備ふるゆゑ是を以てと上を受け引證は興教大師御撰述の阿字觀記の御文である淺觀但信眞遊淨土とは下根劣慧の者は眞言の實相を圓に觀ずると能はざるも信ずる時は往生淨土の益を蒙るとの意を云ひ深修圓智現證佛道とは上根勝慧の者は眞言の實相を圓に觀ずる故に即身成佛の勝益を得るとの意を云ふ

是れ勝慧は直に不二の深理に契ひ劣慧は順次に往生を成ずるの意なり

此は上の阿字觀記の文の述意である已上は上下二根に通じて示されたり

されば下根劣慧の衆生と雖淨土に往生せば再び六道の苦界に輪回すると無く

已下は別して下根のみに付て示す かく上下二根共に利益し玉ふ眞言密教なるゆゑに如何に下根劣慧の者と雖も眞言念誦の功力によつて有緣の淨土に往生する時は再び六道に輪回するとなしとの意である六道とは地獄餓鬼畜生修羅人間天乘の六界を指し輪回とは六界を回り經て生死の絶へぬを云ふ

常に諸佛菩薩の教化を受け終に生佛同體の悟を開き眞言祕教の理に應ぜんと露も疑あるべからず

此は往生淨土已後の相を叙ぶ。淨土に往生する時は。各々淨土の教主。彌陀如來藥師如來彌勒菩薩等の。微妙の說法を聽聞すると
を得る故に。見佛聞法の利益によつて。終に生佛同體の悟りを開き。卽身成佛を宗とする。眞言密教の教理に相應すると。毫も疑なしとの意を示す

依て此度といふ此度を。六道輪回の終とし

受難き人身を受け。値ひ難き密教に値ひ奉ることを得たるを。此度といふ此度を。と。詞を重ねて欣ぶべきを云ふ。六道輪回の終といしとは。業を造り果を感じて。彼の六道を生々世々に。彷徨回るは。必らず此度の生を。終りとせよとの意である

密教値遇の緣に依り。淨土に往生することの貴さを歡び

眞言安心和讃に。靑龍阿闍梨の教誡に。菩提を得るは易けれど。眞言祕密に逢ふとの。得がたきなりと演玉ふとある通り。往生の難きにも非ず。成佛の難きにも非ず。唯此眞言祕密の教法に。値ひ奉ることの難きである。されば此難値難聞の法に値ひ奉り。殊に一稱眞言の功力によつて。往生淨土の業の定まることを。歡ぶへしとの意を云ふ

怠りなく。眞言念誦の相續を。勵ますべきなり

一稱眞言決定往生と。安心決定せし上は。一期の間眞言念誦相續の行業。怠るべからずとの結示である

第三　値遇密教章

夫れ惟みれば。無量多生の間に。受難きは人界の生。曠劫流轉の中に値ひ難きは如來の教なり

夫れは第一章の下の如し。惟みれば。とは。意に深く思ひ見ることにて。今は人間受生の相を觀ずる詞となす。無量多生の下は。密嚴諸

祕釋五八右求聞持表白の文による。無量多生の間に受難きは人界の生とは此に死しては彼に生し彼に死しては此に生し量り無く生を受くる其間に受難きは人間受生の幸ひなるを云ふ曠劫流轉の中に値ひ難きは如來の教なりとは曠は曠遠の貌劫は梵語にして具には劫破と云ふ此には時分と譯するゆゑに曠遠なる時分より已來車の輪の回るが如く六道に流轉する中に値ひ奉るとの難きは如來所說の教法であるとの意を云ふ

是故に經には人身難得佛世難値と說玉へり

此は涅槃經二十三に人身難得如優曇華我今已得如來難値如優曇華我今已値とある經文を取意して引證せられたり

今我等受難き人身を受け尙値ひ難き眞言密教に値ひ奉るとを得たるは

人身を得て佛法に遇ふは三千年に一度咲く優曇華の如き最とも貴ふとき因緣なるに中にも難値難聞なる法身如來の說き玉ひし眞言密教に値遇せしは如何なる有り難きとゞやとの意である

是れ則宿福の感ずる所曩因の招く所なり

是れ則とは前章の如く宿福の感ずる所曩因の招く所なりとの二句は全く密嚴諸祕釋五八右の文にして宿福とは宿世の福業と云ふとにて密教に値遇するとは過去世善業の所感なるを云ひ曩因とは曩昔の善因と云ふとにて密教に値遇するとは偏に先世の善業力の招く所であるとの意を云ふ

然るを今生若勤めずして空く此身を過さば出離何れの時をか期すべけん

然るをとはしかあるをと云ふ義にして修因得果は諸教の掟なれば値遇密教の善果を得るは宿世善業の因によるしかあるに

今生にて若勤修せずんば生死出離の果を得る能はざると譬へば火はものを燒き水はものを濡すと云ふことを知り辨へて居ても火に觸ねば燒けもせず水に觸ねば濡もせぬ如く祕密甚深の教法も勤修せずして空く一生を過せば火に觸れず水に觸れぬと同樣にて煩惱罪障を燒き盡して生死を解脫し淨土往生の潤ひは何の時かもはかられぬとの意である

電光朝露の假の身なれば早く萬事を擲て後世の用心を致すべし

電光朝露とはいなづまあさつゆにて本說は金剛般若經に如夢幻泡影如露亦如電と說き玉ふてあるはかなきたとへのことばである假の身なればとは○引寄せて結べば柴の庵なり とくれば もとの野原なりけりと云ふ古歌の如く五蘊假和合のはかなき身の上なるを云ふ早く萬事を擲て後世の用心を致すべしとは士農工商の職業をすてよとのことでは決してなひ後世の大事なることを切に勸め玉ふ御辭にて幾億萬圓とも價の知れぬ我が靈魂の歸着する未來の構へを致せとの意を云ふ

其用心は他に非ず偏に此眞言不思議の功德力を信受して露疑はず只ありがたく信ずる心の一筋に決定し

後世の用心と云ふも外ではなひ下根劣慧の身の上は自身の分限を能く知り及ばぬ智慧の分別を止め只管に法身如來の御本誓より溢れ出し眞言教益を賴み奉るのみにありと信じて疑はざるを云ふ只ありがたく信ずる心の一筋に決定しとは一唱眞言決定往生の外はなにをも白糸の只一筋に決定し物にまきれぬを云ふ

設ひいかなる時にても精神更に變ることなく値遇密教の因緣を毫も忘れざる

同じ御法を信ずる人の身の上にも或は幸ひを得或は不幸を重

ね憂悲苦惱富貴歡樂人間一代には種々なる運命に遭遇とある
も此は宿善の厚薄と信心の淺深とによるとなれば幸不幸いか
なる時にても信心を誤らず値遇密教の因緣は猶も忘れず歡ぶ
べしとの誡に肝要なる御教示である
是を決定往生の信者と云べきなり
幸不幸いかなる時にても値遇密教の因緣を歡んで精神毫も變
らざる是を平生往生の安心決定したる眞實の信者と云ふべき
であるとの意を示す

第四　顯密對辨章

夫れ佛教區なれども何れも我等をして轉迷開悟せしむるの外は
これなし
夫れ佛教區なれどもとは顯密大小半滿權實と種々に教法の差
別なるを云ふ何れも我等をして轉迷開悟せしむるの外はこれ
なしとは顯密大小半滿權實と種々に差別すといへども其要を
云へば何れも我等一切衆生をして轉迷開悟せしむるの外なし
との意を云ふ
其轉迷開悟せしむるの道亦多しと雖之を要するに顯密の二教を
出ざるなり
轉迷開悟は一切佛教の要領にして轉迷開悟せしむるの方法も
亦種々に差別ありといへども大に之を分つ時は顯教密教の二
教を出ず顯教は一心の利刀を翫んで轉迷開悟せしめ密教は三
密の金剛を揮ふて轉迷開悟せしむ
就中顯教に依て修行する者は三大僧祇を經て而も猶滯寂す密教
に依て開悟する者は必ず一生に成佛す
顯教に依て成佛を期する者は三大僧祇の修行せざれば成佛す

ると能はず故に起信論には一切菩薩皆經三阿僧祇と釋し玉ふ三祇の中一僧祇と云ふ時間に芥子劫と磐石劫との二の譬喩あり芥子劫のとは智度論三十七に有方百由旬城溢滿芥子有長壽人過百歳持去一芥子盡劫猶不盡とあり磐石劫のとは同論に又有方百由旬石有人每百歳以迦尸羅衣輕輭疊衣一來拂之石盡劫猶不竭とある芥子劫磐石劫何れも時間の長きとを示す而して此劫を一時間とし之を三箇合せしを三大僧祇と云ふ是の如く長遠なる三大僧祇の間六度萬行を修して成佛すと云ふすら猶是れ與へての沙汰なり奪て之を眞實より云ふ時は三大僧祇を經るといへども祕密の法門によらずんば成佛するとなしとす是以て高祖大師は教王經の開題に三世一切如來皆從此門而成佛餘教說成佛者並是方便引攝之言耳不是究竟實談述玉ふ此等の意を示して顯教に依て修行する者は三大僧祇を經て而も猶滯寂すと云ふ滯寂は所謂沈空滯寂にして顯教至極の一道空寂の理に滯て後位に祕密の金城あるとを知らざる分齊なり。密教に依て開悟するものは然らず三密の修行を如說に修する時は一念一時一生に成佛するとを得る之を密教に依て開悟する者は必ず一生に成佛すと教示し玉ふ

是故に金剛頂五祕密經には若於顯教修行者久經三大無數劫然後證成無上菩提於其中間十進九退と說玉ひ

所引の經は文意解し易し別に解釋を要せず中に於て十進九退とは地前地上に亘り三大僧祇を經る間に或は進み或は退き進退不定なるを十進九退と說玉ひしものにて敢て十と九との二字に意を用ひず

又金剛頂經には修此三昧者現證佛菩提と說玉ひ

此經文近くは卽身義に引證して卽身成佛の證據とし玉ふ畧し

て經の文意を述れば此三昧の三字は所修の法にして一字頂輪王の內證をさし修者の二字は能修の人にて眞言行人をさす現は現身を云ひ佛菩提は所得の果にして聲聞緣覺菩薩の三乘の覺悟に棟びて卽身成佛の深位を指す證は證得すと云ふ意である

又龍樹菩薩の菩提心論には唯眞言法中卽身成佛故是說三摩地法於諸教中闕而不書と述玉へり

此は龍樹菩薩所造の論の中に於ても密藏肝心の論にして顯密二教の差別淺深及び成佛の遲速勝劣皆此論の中に說王ふてある諸教とは他受用身所說の顯教をさし是說三摩地法とは法身如來自內證の三摩地にして更に化他の方便說に亘らざる眞言法を云ふ所謂五部の祕觀三密の妙行を指す凡そ卽身成佛の成不成は三摩地法の說不說による然るに此三摩地法は獨眞言法の中にのみ說て顯乘諸教の中には說ざるゆゑに顯教にては一生に卽身成佛すると能はずとの論判である

されば上根正機の者は如說に修行して一生に成佛すると難しとて歎くべからずども下根劣慧の者は一生に成佛すると難しとて歎くべからず

如上は上根正機の者と顯乘所修の人とを相望して顯教は三劫成佛密教は一生成佛と云ふ顯劣密勝の對辨は所引の經論にて明了である已下は下根劣慧の者と顯乘所修の人とを待對して顯劣密勝の旨を明し玉ふ其中此一段は下根劣慧の者は一生成佛の妙教に逢ひながら機教相應せざる故に今生に於て凡位を超て佛位に昇ると能はずとて決して歎くべからずとの旨を示されたり

教益甚深の勝能を備へたる密教なるが故に假令下根劣慧の輩なりとも此教に値遇し奉るとを歎び

教益甚深の勝能を備へたる密教なるが故にとは大日如來自性法界宮に住し末世難化の衆生までも漏らさず救度せんが爲に此祕密甚深の勝能を備へし教益を施し玉ふを云ふ假令下根劣慧の輩なりとも此教に値遇し奉ることを歡びとは教力勝能の强きが故に下根劣慧の者といへども淨土に往生することを得るは偏に眞言を念誦する値遇密教の因緣に由ることゞと眞實に歡ぶべしとの意を云ふ

我等が如き罪業深重なる衆生も唯眞言陀羅尼のみ有て能く救け玉ふゞと一眞言に信決定する時は往生淨土疑なきなり

眞言密教は萬機普益の妙教なる故に持戒破戒を問はず出家在家を擇ばず男女善惡を論せず貴賤老幼を別たざるのみならず假令如何なる罪業深重の者までも救ひ玉ふと云ふことは六波羅密經大佛頂大隨求陀羅尼經等に具に說玉へり此等の經意によつて我等が如き罪業深重なる衆生も唯眞言陀羅尼のみ有で能く救け玉ふゞと示してある一眞言に信決定する時は往生淨土疑なきなりとは機根最劣なるものは一生に成佛すると能はざれども一眞言に他力の信を決する時は往生淨土の巨益あるとは疑なしとの仰せである

さて何れの淨土に往生するも更に變りなく皆佛智不思議の說法を聽聞し久からずして當に阿耨菩提を成すべし

此は下根の者の淨土往生已後の相を示す何れの淨土に往生するも更に變りなくとは一切衆生の願に任せて十方淨土何れに往生するも無障碍の土にして勝劣なきが故に一佛淨土に往生すれば十方淨土に往來すると自在無礙なれば何れの淨土にても往生を遂れば生々世々の父母妻子眷屬及び一切有緣の衆生と共に微妙の說法を聽聞せんと何れの淨土も更に變りあると

なしとの意を云ふ。皆佛智不思議の說法を聽聞し等とは。佛菩薩の說法は。三輪不思議にして。一々衆生の機を鑒みて。其機相應の法を說き玉ふゆゑに。速に阿耨無上菩提正覺を成ず。是れ所謂二生三生に引も教益甚深と稱する所以である

依て彼の三大僧祇を經て猶滯寂する顯教に望むれば。密教の最勝無比なるとは。知るべきなり

上來の文の如く。下根劣慧の人たりとも。二生三生には必ず成佛するゆゑ。三大僧祇を經ても。猶成佛すると能はずして。滯寂する顯教の人に望むれば。顯劣密勝なるとは。道理明らかである

加之。餘の教法に於て。定業は轉じ難しと說けども。獨祕密最上の教法は。教益甚深にして。能く其定業をも轉ずるが故に。諦信決定して。眞言を唱ふる者は。現當二世の利益空しからざるなり

已下は特に定業の轉不轉を以て。顯劣密勝の義を對辨し玉ふ一段である。凡そ一天下の災害苦惱は。一天下幾億萬人の共業所感である。一國の災害苦惱は。一國人民の共業所感である。一郡一村の災害苦惱は。一郡一村の人民の共業所感である。一個人の災害苦惱は。一個人の業力所感である。是の如く災害苦惱に大小差別ありといへども。悉く業力のしからしむるものとす。他門には多く定業不轉と談ずるゆゑに。只未來往生の益のみを說て。現世の利益を示さざるのみならず。還て嚴禁すれども。密教は然らず。教力勝れて定業をも。能く轉ずる功能を備へたるゆゑに。除災與樂より鎭護國家の大益に至るまで。諦信決定して此眞言を唱ふる時は。其利益決して空しからずとの意である

第五　二門分別章

吾宗に於て。機教相應門と。教益甚深門との二種有て。一切の群機を

攝し盡さずと云となし。是れ餘教と大に殊なる所なり

吾宗に於てとは。總じて顯教の諸宗に簡て。吾眞言密宗に於ての意である。機教相應門とは。函蓋相稱するが如くに。佛所說の能被の教理と。之を奉する所被の機根との。智行相ひ契ひ。乃ち一生に即身成佛する。上根上智の人の分齊を云ふ。所謂自力門なり。教益甚深門とは。機根最劣にして機は卑く教は勝れて。機と教と相應と云と。譯には到らざれども。教力の勝れたるによつて。順次淨土に往生するを云ふ。即ち下根劣慧の蒙る他力門なり。吾が眞言宗教は。此自力他力の二門並べ運んで。利鈍の萬機を普く化益するゆゑに。一切の群機を攝し盡さずと云となしと云ふ。群機と云ひ萬機と云ふ。共に諸機のことにして。機根の種類數多ありといへども。攝すれば利鈍二機の外なしと知るべし。是れ餘教と大に殊なる所なりとは。已に自力他力の二門並べ傳へて。利鈍の萬機を漏さず攝し盡すゆゑ。偏に自力の一門のみを傳ふる。法相三論の權大乘とも大に異なり。又單に他力の一門のみを傳ふる。念佛宗とも大に異なるとの意を云ふ。而して其自力と云ひ他力と云ふも。亦餘教と大に異なる所以を傳へて。いよいよ密教の殊勝なることを信知すべし

就中上根上智の人は。五相三密の瑜伽に住し。父母所生の肉身を轉ぜず。即身に成佛する。是を機教相應門の正機と云

已下は上根の人と下根の人との。所修の行と所得の果との分齊を明す。其中此一段は上根勝慧の人の分齊を示す。上根上智の人とは。上根は信進念定慧の五根利なるを云ひ。上智は此五根の中別して慧根の利なるを云ふ。五相三密の瑜伽に住しとは。五相は一に通達菩提心。二に修菩提心。三に成金剛身。四に證金剛身。五に佛身圓滿にて。眞言行人の成佛する修道の徑路である。通達菩

提心とは行人が始て心内に圓明の月輪を觀する位を云ふ修菩提心とは此月輪が心内に顯はるる位を云ふ成金剛身とは此月輪の中に佛の功德本誓を現じて此本誓の形相を舒て法界に及ぼし卷て心内に飲むる卷舒自在なる位を云ふ證金剛身とは此本誓の形相を自在にする德を全く成滿する位を云ふ佛身圓滿とは上の諸相を圓滿して實に即身成佛する位を云ふ三密は身語意の三密にて手に印を結び口に眞言を唱へ心に觀念を運ぶを云ふ瑜伽は梵語にて此に相應と譯す相應は文字の如き意味にて即ち行人の修する五相三密の妙行が彼の眞理と相應する塲合を云ふ父母所生の肉身を轉ぜず即身に成佛するとは五相三密の觀行を如說に修する時は不轉肉身得無漏法の故に此身此儘成佛することを得るを云ふ是を機教相應門の正機と云とは正く眞言宗の法教を稟くるに堪ゆる即身成佛の機根と云ふ義にして此正所被の機根に頓漸超の三類あれども此は共に一生に成佛する行人の上に分かる不同なれば總じて正機と云ひ又は上根勝慧の人と云ふ

又下根劣慧の輩一生頓悟の法門に遇ひながら即身に成佛すると能はざれども眞言念誦の功力に依て順次に淨土へ往生することを得る是を教益甚深門の機根とす

此一段は下根劣慧の人の分齊を示す下根劣慧の人は一生成佛の妙教に逢ふといへども五根も調はず智慧も鈍きが故に機と教と相應せざるを以て一生に成佛すると能はず然れども諦信決定して眞言を唱ふる時は假令機根は最劣なるも教力の不思議によつて順次淨土に往生することの利益を蒙ることを教益甚深門の機根と云ふ所謂結緣機である之を下根劣慧の人と稱す結緣機とは未來成佛の因緣を結了する機根と云ふ義にして一密二

密を修する傍機より。一見曼荼の人に至るまでを。總じてさすゆへに結緣の機類甚廣し

凡そ眞言所被の機類。多しといへども。攝すれば此二機を出ず

密教所被の機類數多ありといへども。攝すれば正機と結緣機との。二機を出ずとの意である

是故に興教大師は。依眞言門機有幾種答有二種機一上根上智期即身成佛二但信行淺期順次往生と述玉へり

此は密嚴諸祕釋六四十三左の。發起問答決疑門の御文を以て。密教所被の機根を攝する時は。正機結緣の二機を出ざる旨を證示し玉ふ。眞言門の三字。祕釋には五輪門とありしを。解し易からしめんが爲に。著者取意して引證す。引文の中期すとは。心內に約束して時の至るを待つを云ふ。但信行淺とは。信力は强勝なるも所修の行は。淺畧にして三密を雙修せざるを云ふ

されば機根は設ひ最劣なるも。此萬機普益の妙教に遇ひし。宿緣の殊勝なるを歡び。教益甚深の不思議力にすがり。往生の正因なる。光明眞言を唱へ。往生淨土を願ふべきなり

此一段は密教の教意高しといへども。時機に相應せざれば。下根の人には更に其益あるとなしと云ふ。古來の謬解を暗に破斥して。師資相承の說によれば。上來教示のある如く。眞言宗には機教相應と教益甚深との二門あつて。利鈍の萬機を悉く攝化し盡すゆゑ。設ひ鈍根の人たりとも其分限に應じて往生淨土の益を蒙るとある旨を示す。此萬機普益の妙教に遇ひし宿緣の殊勝なるを歡びとは。往生成佛の難きに非ず。唯此教に逢ふとの易からざるに由る。然るに今此難値の妙教に値ひ奉ることを得たるは。宿緣の深きとゞと歡ぶべしとの意を云ふ。教益甚深の不思議力にすがりとは。下根劣慧の往生に付ては。或は願力不思議にすがれと。

勸むる教へもあれども。吾宗にては佛世尊の本誓より。御說遊ばされし教力不思議にすがつて。往生淨土の本懷を遂よとの意である。往生の正因なる光明眞言を唱へ往生淨土を願ふべきなりとは。光明眞言は諸佛の總呪にして。十方淨土に往生するの正因正業なれば。克く此旨を信知して。日日念誦相續すべしとの御教示である

第六　無常迅速章

我等つらつら。生佛迷悟の境界を案ずるに

我等は吾人の身上をさし。つらつらは第二章に釋せしが如し。生佛迷悟の境界を案ずるにとは。迷ひの衆生界と悟りの佛界との境界を考へ察するにと云ふ意である

諸佛は三平等を悟りて。萬德の眞城に住し玉ひ。衆生は一眞如に迷ひて。六道の幻野にさまよふ

此は全く密嚴遺教錄三四右勸發頌の文による。諸佛は三平等を悟りて萬德の眞城に住し玉ひとは。諸佛は心佛衆生是三無差別の實相を證悟し。萬德圓滿せし眞實の法城に安住し玉ふとの意である。衆生は一眞如に迷ひて六道の幻野にさまよふとは。衆生は眞如の不一不異の理に暗ふして。心佛衆生是三無差別の實體を悟らず。却て生佛自他に隔歷の思ひを起し。徒らに業を造り業より果を感じて。生々世々に地獄餓鬼畜生修羅人天の。六の道筋を吟ひ回るを云ふ

是を以て高祖大師は。迷者名衆生。悟者號大覺と仰せられたり

聲字實相義を引證して。衆生界と佛界とは。其體性一なれども。唯我等一念の迷悟によつて。凡聖差別するとの意を示し玉ふ。但聲字實相義の本文には。悟者號大覺の句を上とし。迷者名衆生の句

を下にしてあれども。此には迷悟と次第して證示せられたり
究竟じて覺悟せざる間は。何れも有爲轉變の棲にて。無爲常住の臺
に非ず

此は佛果の究竟位に至らざる間は。何れも有爲轉變の區域をま
ぬがれざる旨を示す。有爲無爲の差別は。四相の遷不によると云
ふが定義にて。有爲とは。爲は爲作造作の義にして。我等凡夫は生
住異滅の四相に。遷易せらるゝを云ひ。無爲とは。爲すと無くして
爲さざると無しと云ふ義にして。生住異滅の四相に。遷易せられ
ざる諸佛の境界を云ふ

故に聖者すら。猶無常を示し玉へり。凡夫何ぞ必滅を遁れん
故にとは上を承け。聖者とは大聖釋迦牟尼世尊を指し。すらはさ
へと云ふに同じ。大聖世尊四十餘年。攝化利生の後。八十入滅の相
を示し玉ふと雖も。凡夫の滅するにと替り。機薪盡て入滅し玉ふ
ゆゑに。猶無常を示し玉へりと云ふ。凡夫は世尊の機薪盡きて。權
に入滅し玉ふに事替り。一期の業力盡きて滅するゆゑに。凡夫何
ぞ必滅を遁れんと云ふ。而して無常は大聖世尊さへ遁れ玉はず。
況や凡夫をやと云ふ意にして。いかなる者も無常の遁れざると
を諭示し玉ふ

誠に風棄の身は。持ち難く霜露の命は。消やすし。無常の風忽扇げば
密嚴遺教錄の勸發頌の文の意によつて無常の道理を明すに。風
棄と霜露との喻を以て。身命のはかなきとを示し。又無常のあり
さまを。風の强く吹くさまにたとへて。下の句を起す因とし玉ふ

春の朝に花を玩びし人も。夕には北邙の煙となり。秋の夕に月を伴
ひし輩も。曉には東岱の雲に隱る。一生の過ぎ易きと。幻夢に異なら
ず。萬事の實無きと。電光に相同じ

已下は竺置山解脫上人の。愚迷發心集の意によつて。無常の道理

を示す。文の中に北邙と東岱とは山の名にして。大唐洛陽のほとりにある墓所にて。吾國の鳥部山舟岡山の如きを云ふ。一生の過易きと幻夢に異ならずとは。幻夢はありと見へてあとかたなき喩へにて。幻術者の實體なくして。異類異形を現ずるが如く。又夢に百般のことを見るも。覺むれば忽ち痕なきが如く。人世のありさまは。實に此ゆめまぼろしの境界なるを云ふ。萬事の實無きと電光に相同じとは。電光はあるかと思へば早やなくなるものゆゑ。即生即死に喩へて無常の理を示し玉ふ

若夫れ命魂一たび此土を辭して。泥犂に沈みなば。永く出離の期無からん

此は一期の壽盡きて。命魂此娑婆世界を去て。來世に趣くを云ふ。泥犂とは梵語にして。正翻には苦具と云ひ。義翻には地獄とも又は無有とも云ふ。無有は喜樂あると無き義にて。來世此地獄に沈淪せば無量永劫の間。生死出離の期限あるとなしとの意を云ふ

吁頼みなきかな。此土の報命。怖るべきかな。來世の業報や

吁頼なきかな。此土の報命とは。吾身の上の果報至て拙く。無常迅速にして。はかなき命の頼みなきを。口に出して嘆息するを云ふ。怖るべきかな來世の業報やとは。因果必然の道理は毫釐もたがはざるゆゑに。來世の苦患は今世の三業四威儀の所作にあるとを知りて深く怖るるを云ふ

かかる悲哀の吾人なれば。偏に後生の一大事を心にかけ。不思議の教益に身を任せ

かかる悲哀の吾人なれば偏に後生の一大事を心にかけとは。上に示しのある如き悲哀を重ねたる吾人の身上なれば。上根上智の人の如く。一生に成佛すると能はざれば。偏に往生淨土の安心を決定せよとの旨を示し。不思議の教益に身を任せとは。眞言の

教力不思議に打任せて往生するぞと信決定せよとの意である

唯朝な夕なに光明眞言念誦相續して出離の要道を求むべきなり

何れの眞言を唱へても功德は同じとなれども別して光明眞言を念誦相續せよとある所は餘の眞言に異なりて儀軌に諸佛の總兜とあると淨不淨を擇ばずとあると不空羅索經に授からずして唱へてよしとあるとの三の所由あるによる出離の要道を求むべきなりとは生死を出離するに肝要なる正道を求むべしとの意である

第七　所詣淨土章

密宗の教意は生佛一如の觀に住して淨土を外に求めず三密瑜伽の妙行に依て成佛を一生に期す

密宗の教意はとは眞言祕密宗の妙教の意はと云ふ義である生佛一如の觀に住してとは佛と衆生との間に隔歷を見ざるを以て密宗の正意とするが故に佛と衆生と其體一味平等にして更に異なるとなき觀念に住するを云ふ淨土を外に求めずとは大日經住心品疏に隨二如來有應之處一無レ非二此宮一不獨在二三界之表一也と釋し玉ふてある如く此娑婆世界を卽密嚴國土と體達して此土の外に淨土を求めざるを云ふ三密瑜伽の妙行に依て成佛を一生に期すとは眞言行者三密の觀行成就して佛の境界と相應するときは父母所生の肉身を轉せず此土に於て一生の間に佛位に昇るが本宗の正意にして之を已が所期とするを云ふ

此は是れ上根上智の機に應ずるの分にして下根劣慧の機は一生の得悟容易の談に非ず是故に下根の者は偏に往生淨土を欣ふべきと肝要なり

如上は上根上智の正機に相應する分限にて下根劣慧の者は現

世一生に成佛するとは容易の談に非れは此者の爲に諸佛は十方に淨土を建立し衆生をして有緣の淨土に往生せしめ往生せし淨土に於て容易く開悟せしめ玉ふされば下根劣慧の者は已が分限に應じたる往生淨土を欣求するが肝要との意である

但淨土は十方に周遍して俱に無礙の境界なりと雖專ら安養と都率との淨土を勸むるとは此土の衆生因緣深くして往生し易ければなり

淨土は東西南北四維上下に遍在して無障無礙の土なるがゆゑに彼の淨土より此淨土に往詣し此淨土より彼の淨土に往來すると無礙自在にして彼此の衆生一室に座するが如くなれば何れの淨土に往生するも同じとなるに自宗他宗の祖師先德が別して安養と都率との淨土を勸め玉ふは此土の衆生は彼の淨土に因緣深きに由る安養は彌陀超世の別願があるゆゑ因緣深くして往生し易く都率は界内の淨土にして當來下生彌勒慈尊のましますによつて因緣深くして往生し易きとの意である

然るに古より他家の人師等淨土に勝劣を分ち往生に難易を論ずる等種々の量解をなせりと雖皆是れ一隅固執の僻說なり

古より他家の人師等とは總して他門の人師をさし別して念佛門の人師を指す淨土に勝劣を分ち往生に難易を論ずる等とは淨土に勝劣を論ずるに西方を勝として都率を劣とするあり或は西方を勝として九方を劣とするあり又往生に難易を論ずるに西方は往生し易く都率は往生し難しとするあり或は西方は往生し易く九方は往生し難しとするあり是の如く種々に勝劣難易を論ずる僻說ありといへども吾宗は吾宗所依の經論によつて十方淨土に勝劣なしと傳ふるとの意である

故に興教大師は安養都率同佛遊處密嚴華藏一心蓮臺惜哉古賢諍

難易於西土悅哉今愚得往生於當處と述玉へり

此は密嚴諸祕釋六左一の御文にして安養都率同佛遊處とは安養淨土の教主阿彌陀如來も都率內院の教主彌勒菩薩も皆大日如來の差別智身にして大日一佛の遊戲し玉ふに異ならざるを云ふ密嚴華藏一心蓮臺とは密は三密嚴は莊嚴にして三密を以て莊嚴する國土なるゆゑに密嚴と云ひ華は理にして理は法界に遍じて諸法を其中に藏むに故に華藏と云ふ此密嚴華藏共に一心の具德の外なきとを示して一心蓮臺と云ふ惜哉古賢諍難易於西土とは密教を傳へざる和漢の高僧が西方を餘方に對して往生の難易を諍ふとを嘆惜して淨土の勝劣を諍ふとを象顯はせり悅哉今愚得往生於當處とは密教値遇の緣の熟したるを悅哉と云ふ興教大師謙遜して自らを今愚と仰せられしも意は一切衆生にあり往生を現身とする時は十方淨土卽密嚴國土と體達するゆゑに現身に往詣せし淨土を當處と云ふ又往生を順次とする時は十方淨土何れなりとも往生せんとする信心の決定せし場所を指して當處と云ふ此釋文を引て十方の淨土に勝劣難易あるとなしと云ふの證據とし玉ふ

抑吾宗の意は勝劣難易を論ぜざるを以て正義とするが故にいかなる下根の人たりとも一眞言に信決定する時は諸佛の加持に誘はれて自ら有緣の淨土に往生するとを得るなり

抑とは上を受け下を起す辭なり吾密宗の教意は十方淨土は悉く密嚴國土の別德とするゆゑ淨土に勝劣を分たず往生に難易を論ぜざるを正義とす下根劣慧の人といへども一眞言に信決定する時は諸佛の加持力に誘引せられて自然と西方なり都率なり其他有緣の淨土に往生するとを得と示し玉ふ

依て淨土は何れなりとも人々の意樂に任せ唯諸佛の總呪たる光

明眞言を。念誦相續して。偏執なく有緣の淨土を。欣ふべきなり

所詣の淨土は行者の意樂に任せて。何れとも限らざるの宗意なれば。十方の淨土に往生する正因となる。諸佛菩薩に通ずる。光明眞言に信決定して。大山に登んとする者は。其脚下を守るべしとある如く。淨土の山頂に往詣せんと欲する者は。往生の正因となる。眞言念誦の脚下を守り。一方へかたよるの偏執をすてて。有緣の淨土を專心に欣求すべしとの意である

第八　皆歸大日章

抑大日如來と申奉るは。十方諸佛の本地。三世種覺の尊主。四十二地の所歸。二十五有の能度の尊にましますが故に

抑とは。上を承け下を起す辭なれども。今は發端の辭とす。大日とは梵に摩訶毘盧遮那と云ふ。如來とは常に如實の道に乘じ來て正覺を成ずと云ふは。應身の如來に約する解釋である。今は法身の如來なる故に。如來は自證の境界なる。如理の道に來住する謂ひにして。來は不來の來である。大日經疏第十九に。自證の境を如と云ひ。其境に住するを來と云ふと。ある御釋を以て。如來の解釋應身に異なることを知るべし。十方諸佛の本地已下の四句は。全く密嚴遺教錄一五十二右の大日畧觀の文に由る。十方諸佛の本地とは。本は根本地は依地の義にして。大地は萬物所依の體なる如く。大日如來は十方諸佛の根本總體なるを云ふ。三世種覺の尊主とは。三世は過去現在未來を云ひ。種覺は種智覺は覺者にして。即ち一切種智を覺れる者と云ふ義にて。三世の諸佛を指す。尊主は尊王主君と云ふが如くにして。大日法帝を尊稱す。四十二地の所歸とは。四十二地は。十住十行十回向十地等覺妙覺を云ふ。所歸は所歸依の尊と云ふことにて。能歸依の四十二地に對して。大日如來

を所歸と云ふ。二十五有の能度の尊とは。二十五有は。四州と。四惡趣と。六欲と。梵天と。四禪と。四空處と。無想と。五那含との二十五にして。即ち所度の生界に當る。能度の尊は能化度の佛界にして。大日如來をさす

頓漸の法門を施設し。利鈍の萬機を攝取し玉ひて。一も漏し玉ふとなし

頓漸は法の一切を攝し。利鈍は機の無盡を攝す。此御文は三摩耶戒儀に。爲欲引導利鈍根性施設種々頓漸法門とあると。密嚴遺教錄一五十二右に。同奉心王廣眼勅詔施設頓漸法門並蒙覺帝遍照教令。攝化利鈍機根とある。兩祖の御釋に依る。眞言所被の機類は數多ありと雖も。悉く利鈍の二機に攝するゆゑに。萬機と云ふも利鈍二機の外なしと知るべし

凡そ佛陀神明。數多ましますと雖。一佛一尊として。大日如來の差別智身に非ざる無し。是故に大日如來を歸命し奉る時は。諸佛諸菩薩を歸命し奉るに異なるとなし

一切の佛陀一切の神明は。悉く大日如來の差別智身なるが故に。能流の本源たる大日如來を歸命ずれば。諸佛諸菩薩を歸命ずるに異なるとなし。例へば主人を呼べば。家來は呼ばずとも自ら來るが如く。普門總德の大日如來を歸命し奉れば。別德たる一門の諸尊聖衆は。自ら御受があるものと信知すべし

又白淨信心を決定して。眞言を唱へ往生成佛を欣ふ時は。一切の神明までも。皆其本懷なりと覺召し。眞言念誦の者を。守護し玉ふなり

白淨信心を決定して眞言を唱へとは。諦信決定して念誦相續するを云ふ。此白淨信心に淺深の二位あるとを。了知するが尤も肝要である。深位の白淨信心は。自心是れ佛なりと體達するの外に。至極の成佛あるとなしと。諦信決定するを云ひ。淺位の白淨信心

は自心是佛の觀は熟せざるも眞言念誦の功力によつて淨土に往生すと諦信決定するを云ふ往生成佛を欣ふ時はとあるゆへに此白淨信心は淺深の二位に通ずと知るべし

何となれば佛菩薩の大悲一切衆生をして終に佛法に勸め入れしめんが爲に方便して假に迹を垂れ玉ふ所の神明なれば悉く大日如來を歸命する中にこもれる故なり

此は悲華經に我滅度後於惡世中現大明神廣度衆生と說玉ふてあるに依る凡そ法身地より種々の形を現じて衆生を利益し玉ふは妙體の上の妙用にして水に離れざる波の如くなれば神明の波相も法身の水性を離るるとなし依て末世難化の衆生を濟度するには同體無緣の慈悲を起し等同流類して種々の姿を現じ玉ふと雖も意は佛道に歸入せしめて無上の證果を得せしめ玉ふにありされば白淨信心決定して往生成佛を欣ひ大日如來を歸命する時は一切の神明は吾本懷として眞言念誦の者を守護し玉ふ是の如く本迹を談ずるも佛菩薩所現の神明にして佛法內の本地垂迹なれば神佛判然の朝旨に戻るとなし歸命ずるとは吾等の最も貴重なる生命をも法身如來に歸投し獻納すと云ふ意にして歸依の至誠を表したる詞である

依て大日如來の御誓願の中には彌陀如來の四十八願も藥師如來の十二上願も其他あらゆる諸佛諸菩薩の誓願本誓一として漏るとなし是故に興教大師は一切佛菩薩誓願本誓無非此大日誓願故又能超彼諸願と述玉へり

一切の諸佛に總願あり別願あり衆生無邊誓願度煩惱無邊誓願斷法門無邊誓願知無上菩提誓願證の四弘誓は諸佛の總願にして別願に至ては彌陀は四十八願に限り藥師は十二上願に限れり然るに大日如來は諸佛の總體なるゆゑ彌陀如來の四十八願

も。藥師如來の十二上願も。其他一切の佛菩薩の總願別願。悉くこめさせられて一も漏るとなき。大日如來の普門の誓願である

との御教示なり。引證は密嚴遺教錄二十五右の御文にして。文意解し易ければ別に解釋を爲さず

されば大日如來の。眞實本願大灌頂の。光明眞言を唱ふる時は。自一切の佛菩薩の本誓に契ふが故に。道俗男女諸共に悉く有緣の淨土へ。往生せらるゝと疑なき者なりと。諦信決定致すべきなり

此は不空羂索經の經意による。光明眞言は佛より觀音薩埵が。一切衆生に代りて授り玉ふゆゑ。吾等此生に身を受けざる己前。既に授與に預るも同じき。利益を蒙り居るを。大日如來の眞實本願と云ふ。大灌頂とは。不空三藏の御釋に。灌謂灌持明諸佛護念。頂謂頭頂表大行尊尚超昇出離何莫由斯とあつて。此眞言を唱ふる者は。諸佛が影の形にそふが如くに。晝夜護念し玉ふを。灌謂灌持明諸佛護念と云ひ。佛道の修行多種ありと雖も。眞言念誦の行が殊に勝るるとの意を示して。頂謂頭頂表大行尊尚と云ふ。一生の間に凡位を超へて佛位に昇るも。生死を出離して淨土に往生するも。咸光明眞言の大灌頂によつて成就するゆゑ。超昇出離何莫由斯と述玉ふ。光明眞言を唱ふる時は。自一切の佛菩薩の本誓に契ふが故に。等とは。光明眞言は諸佛菩薩の總眞言なるゆゑ。何れの佛何れの菩薩にも通ぜずと云ふとなく。何れの佛何れの菩薩の本誓にも契はずと云ふとなし。依て之を唱ふる時は。出家も在家も。善男も善女も共に。安養都率等の有緣の淨土に往生すると疑なしと。諦信すべしとの御教示である

第九　大日淨土章

大日如來の淨土は。自性法界宮。密嚴國土と稱して。十地等覺の菩薩

も。大日如來の如持を離れては。猶見聞の境界に非ずとす

大日如來は前章に畧して解釋するが如し。淨土は大日如來の所居の淨土にして。自性法界宮とは。自は自然自爾の義。性は不改に名け。法には清淨の義と廣大の義と軌持の義とあり。界には體の義差別の義あり。故に自性法界宮は無始自然の土にして。三世常恒の淨宮なるのみならず。十方に遍じて剎として到らざる所なき廣大金剛の體にして。心王の都し玉ふ妙住の境を云ふ。密嚴國土とは。密は三密嚴は莊嚴にして。三密の功德を以て莊嚴する國土なるを云ふ。是を以て密嚴諸祕釋六十九右には。法界爲宮所處道場無非密嚴と述べ玉ふ。眞言密教両部祕藏は。法身大毘盧遮那如來。從身流出の自眷屬と俱に。自性法界宮に住して。自受法樂の爲に。演說し玉ふ所の法門なれば。假令。十地等覺の菩薩と雖も。如來の加持を離るる時は。見聞の境界に非ずとの御示しである

然るを大日如來實の如く自心を覺悟し玉ひて。本有莊嚴の淨土を開顯し

實の如く自心を覺悟し玉ひてとは。自心の實相を覺悟して。心佛衆生是三無差別の境界に達し玉ふを云ふ。本有莊嚴の淨土を開顯しとは。三平等の實理に契達して。自心を覺悟すれば。自然に五智莊嚴の淨土は。自心の源底より顯れ。從身流出の自眷屬と。自受法樂し玉ふを云ふ

十方諸佛と共に。眞言加持の事業をなし。無餘の衆生を濟度し玉ふ

十方諸佛と共にとは。上の自然顯示の法界宮に於て。大日如來が一切如來と。俱に集會し玉ふを云ふ。眞言加持の事業をなしとは。此法界宮にて。大日如來は帝王主君の位に居し。釋迦如來阿彌陀如來等の。一切如來を隨應顯現して。淨土穢土に遍じて。一切衆生を濟度し玉ふ。神變の作業を云ふ。無餘の衆生を濟度し玉ふとは

無餘は字の如く餘り無しと云ふとにて一切衆生を指す

其神變不思議の境界を名づけて自性法界宮と稱し又は密嚴國土と號するなり

神變とは神は不測の義變は轉變自在の義にして總じて因人の思慮を以て測られざる境界を云ふ不思議とは不可思議と云ふとにして凡夫の意を以て思ふべからず凡天の口を以て議るべからざる境界を本有の義に依て自性法界宮と稱し修生の義に依て密嚴國土と號すとの意である

是故に淨土に於て二あるに非ず唯是れ大日如來の一心法界本有莊嚴の淨土にして安養都率を始め あらゆる十方の淨土も皆此密嚴國土の中の一佛土にあらざるなし

自性法界宮と密嚴國土と名稱は替れども本有の義に依ると修生の義に依るとの不同にして本有修生は一法の二義なれば其體二あるにあらず元より同一の法界宮である龍樹菩薩の菩提心論に若歸本密嚴國土とあれば安養も都率もあらゆる淨土悉く密嚴國土の中の一佛土にあらざるなし是を以て密嚴諸祕釋三三十二左に密嚴者極樂之總體極樂者密嚴之別德と御釋あつて餘の九方の淨土も亦是の如く例知すべしとの意を含めりされば十方の淨土も娑婆世界も通同して密嚴國土と稱するゆゑ大日如來の淨土は廣大無邊の境界なりと知るべし

是故に興教大師は十方淨土一佛化土一切如來悉是大日と述玉へり

此は密嚴諸祕釋六一右の御文である十方淨土とは東西南北四維上下の淨土を云ひ一佛化土とは十方淨土悉く大日一佛の所化の土の外なしとの意を云ふ一切如來とは十方淨土の教主を云ひ悉是大日とは彌陀も藥師も釋迦も彌勒も悉く大日如來の差

別智身に非ざるとなしとの意を云ふ

されば下根劣慧の輩といへども。一眞言に信決定する時は。十方の淨土何れなりとも。其願に任せて往生せんと決定なり

既に十方の淨土何れも。密嚴國土の外なきゆゑに。諸佛の總咒たる。光明眞言に信決定して唱ふれば。下根の人たりとも。誦咒の功力が正因となつて。有緣の淨土に往生すると。決定との意である

又往生をだに遂ぐれば。淨土は穢土に異なりて。互に往來すると。無礙自在なれば

已下は淨土に往生せし已後の相を示す。又は更端の辭にしてだにはさへと云ふに同じ。併此は古說にて惡しとの說あれども。今はさへと云ふに順ず。十方淨土の中西方なり都率なり。何れの淨土にても往生さへ遂れば。淨土は有障有礙の穢土に異なりて。無障無礙なれば。互に往來すると自由自在なる故に。一佛淨土に往生すれば。十方淨土更に彼此の隔てなく。父母妻子眷屬及び一切衆生が一室に座するが如くに。平等一味の境界であるとの意を云ふ

生生世世の父母妻子眷屬及び一切有緣の衆生と共に微妙の說法を聽聞し

何れの淨土にもあれ。往生を遂ぐれば。一切有緣の衆生と共に。無比の莊嚴を拜見して。微妙の說法を聽聞することを得る。微妙の說法とは。三輪不思議の說法のことを云ふ。三輪不思議とは。光明記一。曰身業現化名神通輪。口業說法名正教輪。意業鑑機名記心輪。三皆摧破衆生惑業故名爲輪。下地不測亦名密とあつて。身輪不思議は。機緣に應じて種々の相貌を現じ。玉ふを云ひ。口輪不思議は。淨名經に如來一音演說法。衆生隨類各得解と說き玉ふてある如く。衆生の機に隨ひ說法し玉ふを云ひ。意輪不思議は。衆生の意を一々

明鏡に物をうつすが如くに鑑み玉ふを云ふ。かかる微妙の説法を聽聞する時は。成佛の期限遠きに非す。然るに之を信じて往生を欣ふ意の起らざるは。是れ愚なるが故にもあらず。亦賢なるが故にもあらず。唯宿善なきが故である。されば佛の誓願深重より説き玉ふ所の。眞言密教の教力不思議を信じ。淨土を願ふ淨信の起りし人は。宿緣の淺からざるとを深く歡ぶべし

終に本具の覺體を開くとを得んは。是れ偏に眞言不思議の教力に在るとゞと。深く信じて。日日光明眞言を念誦相續し。急ぎて淨土往生を願ふべきなり

下根劣慧の人とても。淨土に往生すれば。唯往生の利益のみに非ず。三輪不思議の説法を聽聞して。終には自心に本來具足してある。本覺の覺體を開くとを得る。是れ則ち成佛のとなり。成佛すれば常在六道度盡衆生の。化益を施す所の大自在を得る。かく二利の大願を滿足する根本は。一眞言に信決定して。往生するにあるとゆゑ。日日光明眞言を念誦相續し急ぎて淨土往生を願ふべきなりと。結示し玉ふたとである

第十　三力具足章

眞言陀羅尼藏の中に説玉へる所の。他力と云は。塵々法々皆悉く六大所成なれば。心佛衆生本來平等平等にして。更に差別あるとと無く眞言陀羅尼藏の中に説玉へる所の他力と云はとは。五藏の中の。第五陀羅尼藏の中に。説玉ふ所の他力と云はと云ふ意である。塵々法々皆悉く六大所成なれば等とは。一塵一法に至るまで。悉く六大の所成なれば。心と佛と衆生との此三。本より無差別にして。其體既に平等平等なれば。決して自他の隔歴を設くるものにあらず。自他の隔歴已に泯ずれば。他力と云ふも更に自他隔歴の他

力に。あらざるとを示して。三力具足の他力なるとを。成ずる所由とし玉ふ

自心と衆生と佛との三密も。亦復平等平等にして。無礙ならずと云となし

既に心と佛と衆生との。其體平等なれば。隨て自心と衆生と佛との。身口意に顯らはる。三業の所作も。其用平等平等にして。亦更に隔歴の緣なし。是の如く三三平等融通無礙する。之を三平等の實義とす。其三三平等のとは。祕藏記に。吾身即印語即眞言心即本尊。是三密平等遍法界名自三平等。吾三平等與本尊三平等同一緣相名他三平等非只本尊吾同一緣相已成未成諸佛三平等亦同一緣相名共三平等と述玉へり。今は此記の意に由る

故に瑜祇經には。常以一字齊運三業と說玉ひ

此は瑜祇經を引て。三三平等融通無礙なるとを證して。三力具足の所由となす。常以一字齊運三業とは。常は常恒の義にして。三世常恒の意を云ふ。一字は鑁の一字とすると。吽の一字とするとの両傳ありといへども。且く吽の一字に付て經意を述れば。凡そ身密の五大も息風を以て根本とし。心法の慮知も息風を以て本體とし。語密の言語も亦息風を以て根本とするゆゑに。此息風は齊く身口意の三業を運動す。而して此三業は即ち心と佛と衆生と、平等に周遍するゆゑ。此一字に於て三三平等融通無礙なる義を說示し玉ふ

大日經王には。以我功德力。如來加持力。及以法界力の。三力を說玉へり是れ則餘教に超過せる。三力具足の他力なり

此は正く大日經を引證して。三力の說所を指し。他力と云ふも即ち三力具足の他力なる旨を示し玉ふ。凡そ世出世一切の事業を成辨するは。三力具足の功に由る。是を以て大日經疏には。以我功

德力故。以如來加持力故。以法界平等力故。以此三緣合故則能成就不思議業と述玉ふ。然らば他力と云ふも自力と云ふも。俱に此三力相應の緣によらざるはなし。而して三力相應の緣は。法界自然の妙用にして。此自然の妙用は。偏に三平等の實義を談ずる。密宗不共の安心に限る旨を示し玉ふ

されば我等凡夫が唱ふる。一遍の眞言も。自六大法界に遍じて。如來の語密と相應するが故に

此は金剛頂經開題に。口誦眞言則與如來語密相應とある。御釋により玉ふ。佛も六大所成にして。衆生も六大所成なれば。唱ふる所の眞言も六大所成なるゆゑに。我等唱ふる一遍の眞言も。自ら六大法界に遍滿するとの意を云ふ

上根勝慧の者は。一生に卽身成佛し。下根劣慧の者は。順次に生往するを得ると。佛說祖訓共に明白なり

上根勝慧の者は一生に卽身成佛しとは。上根勝慧の者は。三密の妙行に依て父母所生の肉身を轉ぜず。一生に卽身成佛することを得るを云ふ。下根劣慧の者は順次に往生するを得るとは。下根劣慧の者は。三密の妙行を雙修すると能はずといへども。諦信決定して眞言を唱ふる時は。順次に淨土へ往生することを得るとの意である。佛說祖訓共に明白なりとは。一生に成佛することを得る佛說祖訓は。近くは卽身成佛義に御引證ある。二經一輪八箇の證文の如く。順次淨土に往生することを得る佛說祖訓は。寶篋印陀羅尼經大隨求陀羅尼經諸儀軌。及び興教大師の密嚴諸祕釋等にあり

と知るべし

又之を唱へて。亡者の爲に回向する時は。其亡者得脫し。往生を遂るも。亦三力具足の加持に依らずと云となし。是れ實に餘教に於て。說かざる所の他力なり

不空羂索經と光明眞言儀軌との意によつて他力の中の他力あるとを示し玉ふ先亡の爲に光明眞言を唱へて回向する時は此土に於て唱へたる功德を彼の苦界にある亡者が受けて離苦得脫するは是れ六大周遍の實體三平等を宗とする不可思議の加持力による是の如く他力の中の他力の祕術あるとは顯乘諸宗の人師等は曉天の夢にも見ざる密宗不共の深旨なるが故に是れ實に餘教に於て說かざる所の他力なりと仰せられたり

是の如く尊き密教なれば値遇の因緣を深く歎び眞言念誦を勵まして餘念なく往生淨土を願ふべきなり

先亡の爲に唱ふる眞言の功德すら先立つ亡者が受て助かるとある尊き密教なれば偏に密教値遇の良緣を歎び無常迅速の世の中なれば眞言念誦相續し唯一筋に淨土往生を願ふべしとの御教示である

第十一　上必秉下章

夫れ眞言宗教は法身如來自內證の法門なるが故に其談ずる所三平等を宗とし三密を行とし凡聖不二なるを安心とする餘教超過の深教なり

夫れ眞言宗教とは第一章の下に解釋するが如し法身如來とは大日獨尊を指す自內證の法門とは法身如來の說法は他受用身の如く十地の菩薩等の他に對せざるゆゑに自と云ひ變化身の如く地前の菩薩二乘凡夫の心外の機緣に隨はざるゆゑに內證と云ふ法は教法門は能入の義にて教法は衆生が佛果の境界に入る能入の門なるが故に法門と云ふ其談ずる所三平等を宗とし

しとは顯教の如く眞如無相の空理を以て宗とするでなく心佛衆生是三無差別の三平等を以て宗とする故に是れ餘教超過で

ある三密を行とし、とは宗體既に三平等なれば所修の行體も顯教の如く遠劫作佛の種因たる六度の行にあらず一生成佛の勝能を具したる三密の妙行を以て所修の行體とする故に是れ亦餘教超過である凡聖不二なるを安心とするとは人々各々に凡聖不二なる覺體を圓具すと已が機を信ずる故に他門に我は是れ現に罪惡生死の凡夫なりと深信すると信機の分齊天地懸隔である是れ亦大ひに餘教に超過せり

是故に若人ありて眞言門に入て如說に修行する時は卽身に成佛するとを得と云旨佛說祖訓共に明なり

佛說祖訓の所在は前章に指示せしが如し

然りと雖三密雙修すると能はざる劣慧の者は一生に成佛すると は難かるべし

因果必然の故に三密醍醐の妙果を證得せんとするには必ず三密雙修の妙行を勤修するに由る然るに下根劣慧の人は一生成佛の妙教に値遇すといへども三密雙修すると能はざる故に一生に卽身成佛するとは甚難しとの意である

されども經には契經等中最爲第一と說玉ひ又先德も最頂之教有攝鈍根之力と述玉へる如く

されどもとは云ふ意味にして經には契經等中最爲第一と說玉ひとは經は六波羅密經である契經等の上に總持門者の四字あり加へ見る時は經意解し易し契經は梵には素怛覽と云ふ卽ち世尊の說玉ひし大小乘の諸經をさす等の字には毘奈耶藏阿毘達磨藏般若藏の三藏を攝む最爲第一は五藏の中に於ては第五の陀羅尼藏を第一とするとの意にして總持門は卽ち陀羅尼藏のとである又先德も最頂之教有攝鈍根之力と述玉へる如くとは總本山教王護國寺の寶庫にある光明眞言

講式に五段ある中。總じて眞言を讃歎する一段の御文にして。高原にある水は。いかほど深き谷底へでも。いとひなく下だる所の能がある如く。祕密甚深の教法は勝れて高きゆゑ。下根劣慧の人をも洩らさず攝化利生し玉ふ所の力用が。備りあるとの意味である

教法いよいよ高ければ。いよいよ卑き鈍根劣慧の輩を始め。四藏の教藥に漏たる。唯除五逆誹謗正法の罪人までも。漏さず助け玉ふ。是れ眞言不思議の教力なり

極善最上の教は。極惡最下の機をも洩さず。救ひ玉ふと云ふことを。示すについて。教いよいよ高ければ機いよいよ卑し。教いよいよ卑ければ機いよいよ高しと云ふ語を。隨義轉用して。眞言の教法いよいよ高ければ。いよいよ卑き唯除五逆誹謗正法の者までも。洩さず救度し玉ふとの教意なることを示されたり。念佛門には唯除五逆誹謗正法の經文に付て。抑止攝取の二門を立て抑止の方では助からぬ姿なれども。攝取の方では助かると云ふことは。祖釋にはあれども經文の說相には決して見へず。然るに吾眞言密教にては。祖釋によるまでもなく。六波羅密經に。四重八重五無間罪謗方等經の人をも解脫せしむべき旨を。佛已に自ら說玉ふてあるによつて。眞言教力の勝るることを信知すべし

今我等幸に。かかる祕密最上の法門に。遇ひ奉ることを得たり。若此度之を信じ之を行ぜずんば。所謂寶の山に入りながら。手を空しうして。歸らんが如くなるべし

嗚呼。我等何の幸ひか宿善開發の時至り。難値難聞なる祕密最上の法門に値遇し奉るは。誠に優曇華の花咲く時に遇ひし如く。千歲に一度も得難き程の歡びなれど。之を信行せずんば折角寶の山に入りながら。空手にして歸るに異ならずして。其益あることなし。

所謂とは華嚴經心地觀經大論等を指す

下根劣慧の我等が往生を遂げんとは唯一眞言のみにて決定なりと。諦信すべし

往生の正因を談ずると。宗々に於て各別なりと雖も。下根劣慧の者は。一密口稱の功力を。往生の正因とする故に。懷圓尊師は下根の者の安心を諭すに。往生は。早や定りぬ。打まかせ眞の言葉。賴みぬるときと詠ぜられたり。一門卽普門の實義を談ずる宗旨なるゆゑ。何れの尊の眞言を唱へても。更に替りあるとなしと雖も諸佛の總呪たる光明眞言の一眞言に信決定するを。尤も好しとす。諦信すべしとは。白淨信心のとにして。妄念妄執の止まざる其中からも。唯光明眞言を唱ふれば。道俗男女共に往生は決定であると。疑の垢の除き去りしを諦信と云ふ。べしは半決定のてには にして。例へば余は後刻行くべし。明日は晴天なるべしと云ふ。語例にて知るべし

此外に下根劣慧の分を忘れて。いと奥深き道理を求めなば還て信心を乱し。往生をも取失ふべし。努力努力過つとなく。白淨信心相續致すべきなり

上根は上根の分限あり。下根は下根の分限あれば。其分限を守るべきに。下根の人が自の分限を打忘れて。上根の人のなすべき所の甚奥深き道理を求むれば。一もとらず二もとらずと云ふ。俚言の如くにて。信心を乱し往生すら遂ると能はざるとになるゆゑ下根は下根の分限を守つて。白淨信心相續致すべしとの。懇切なる御教示である

第十二　大悲深重章

咄。我等は妄想の眠深し。流來生死の始。何れの時ぞ。輪回日久し。菩提

覺悟の終何れの日ぞや冥路より冥路に入て無礙の光明を失ひ業海より業海に漂ひて六趣にさまよふと車の廻るが如し

咄は嘆息の辭にして自分の果報拙きをなげきいかるの意味である我等は妄想の眠深しより車の廻るが如しと云ふまでは全く密嚴諸祕譯二右不動講式の文による妄想の眠深し流來生死の始何れの時ぞとは一迷未斷の凡夫は妄想顛倒の眠深ければ生れ生れ生れて生の始に暗きを云ひ輪回日久し菩提覺悟の終何れの日ぞやとは六道に輪回すると久しければ死に死に死んで死の終に暗きを云ふ冥路より冥路に入てとは從冥入冥と云ふ經文によつて暗きより暗き路にぞ入りぬべしとの意を示し無礙の光明を失ひとは心佛衆生是三無差別の覺體を備へながら それを失ひ重障の凡夫となりはてたるを云ふ業海より業海に漂ひてとは此に死して彼に生じ彼に死して此に生じ生死流轉のはてなきことを大海に漂ふに喩へられたり六趣にさまよふと車の廻るが如しとは心地觀經に有情輪回生六道猶如車輪無始終とあるによる六は地獄餓鬼畜生修羅人間天道を云ひ趣は心の趣り趣くと云ふ義にして餓鬼道地獄道人道天道と種々の業に引かれて趣り趣くと恰かも車の輪の上となり下となりぐる〳〵回るが如くであるとの意を云ふ

されば我等いかなる方便を以てか此輪回生死を解脫すべき唯偏に眞言不思議の大悲教益に依るに非ざるよりは爭か此苦界を出離することを得ん

我等は重障根鈍の凡夫なればいかなるてだてを以てか輪回生死を解脫すべきかと云ふに四重八重五無間罪の人までも洩さず救度し玉ふとある大悲深重の眞言教益によらずんば何にとして生死を出離することを得んとの意を云ふ

抑我等佛法に逢ひ奉るすら。猶盲龜の浮木に遇へるが如き因緣なるに。況や大悲深重なる眞言教益に値遇し奉るとは。實に歡の中の歡。幸の中の幸なり

抑は上を受け下を起すの辭。すらは此山は女すら登る抔と云ふ如くにて。さへと云ふに同じ。我等常途の佛法に逢ひ奉るさへの意である。猶盲龜の浮木に遇へるが如き同緣なるにとは。涅槃經に清淨法寶難得見聞我今已聞猶如盲龜値浮木孔と說玉ふにより。明惠上人は此經意を○目しひたる龜の浮木に。値へるかな。たま〳〵得たる。法の船橋と詠じ玉ふ。常途の佛法に逢ふすら是の如し。まして大悲深重にして。四重八重五無間罪謗方等經一聞提の者までも救度し玉ふとある。眞言教益に値遇し奉るとは。實に歡の上の歡。幸の上の幸であるとの意を云ふ

是故に生死を出離せんとは。唯此時に在りと。深く大悲深重の教益に信を凝し。平生往生の安心を決定せんとこそ。今世後世の一大事なり

唯此時に在りとは。眞言密教に値遇せし時を云ふ。信を凝しとは心を一境に止るを云ふ。平生往生とは。臨終に對することばにして。存命の平生に未來往生の業因が成就するを云ふ。譬へば殺生罪をつくるに。殺されたる者の命根の絶る時を。墮獄の業の決する時とす。此者臨終にかさねて。殺生罪をつくらざれども。平生の業にひかれて。必ず墮獄する如く。眞言念誦の行業も亦是の如く。心を一境に止めて不思議の悲願を仰ぎ。疑を晴して眞言を唱ふれば。唱ふる聲の終る其時に。必ず往生の業は定まるゆゑ。臨終にかさねて唱へざれども。往生するとは決定なりと諦信するを。平生往生の安心を決定せし人と云ふ。こそは主格のてにはにして。事物を撰り分け指す詞なれば。雪こそ白けれ。墨こそ黑けれとの

如く。今も生死を出離して。往生淨土を欣ふには。平生往生の安心こそ。今世後世の一大事なるべと。殊に撰り分けて示し玉ふ

故に興教大師は。若有善男善女。當持誦此明者。三業所有一切作業。皆作如法實行。六情所犯十惡五逆。悉歸清淨慧業。故在在處處。永離三途八難。生生世世。常遊淨土妙國と仰せられたり

此は密嚴遺教錄一六右大日眞言開題の御文である。若有善男善女當持誦此明者とは。善男善女は我等の身の上をさし。此明の明は眞言陀羅尼を指す。持誦は受持讀誦するを云ふ。三業所有一切作業皆成如法實行とは。密嚴遺教錄の全文には。三業所作一切善根皆成如法實行とあるを。取意して證示せられたり。疑謗之逆緣猶過權教萬行。信聞順業誰比顯教六度とも。御釈ある密宗の教意なるゆゑに。諦信決定して眞言を唱ふる時は。身口意の三業になす微少の善根も。皆往生成佛の實行となるとの意を云ふ。六情所犯十惡五逆悉歸清淨慧業とは。眞言の教力勝るるゆゑ。權門の所談にと替り。十惡五逆の罪業と雖も。眞言念誦の功力を以て消滅せしめ。之を緣として成佛の果を結ぶを云ふ。在在處處永離三途八難とは。在在處處は。何國にても云ふに同じ。三途は地獄餓鬼畜生を云ひ。八難は地獄と餓鬼と畜生と北州と長壽天と盲聾瘖瘂と世智辨聰と佛前佛後とを云ふ。生生世世常遊淨土妙國とは。生るると無量なれば生生と云ひ。生ずる世非一なれば世世と重言す。三途八難處を除き。佛法有緣の淨國をさして。淨土妙國と云ふ

依て四重八重の惡人も五從三從の女人も。此眞言を唱ふる時は決定往生疑なしと。一眞言に他力の信を決し行住座臥に眞言念誦相續して。淨土往生を願ふべきなり

四重とは。殺生偷盜邪婬妄語を云ひ。八重とは。殺盜婬妄觸八覆隨を云ふと。又前の四重に自讃毀他慳生毀辱瞋不受謝誹謗三寶の

四重を加へて云ふとの両説あれども共に含むと知るべし此重罪を犯せし者は權大乘の所談にては斷頭罪なるゆゑに いかに懺悔すと雖も再び佛種を生ずるとなしとす然るに眞言密教は教力勝るるゆゑに此極惡重罪の者までも洩さず救度し玉ふこれぞ大悲深重と稱する所以である五障三從の女人とは五障三從のとは第十五女人往生章の下にて解釋するゆゑ此には畧す此眞言を唱ふる時は決定往生疑なしと一眞言に他力の信を決しとは眞言に不可思議の功力あるとを露疑はず諦信して唱ふれば教力の不思議にて往生を得ると譬へば蚊虻も驥尾につく時は一日に數十里を行くが如くに信を決するを他力の信と云ふ行住座臥に眞言念誦相續して淨土往生を願ふべきなりと は寢ても覺ても不思議の教益を信じ唱ふる眞言は咸往生淨土の正因となる巨益あるとの御示しである賴むは所歸の佛につ いて云ひ願ふは所詣の土について云ふ辭なるゆゑに結語に願ふべきなりとあるは所詣の淨土について云ふとと了知すべし

第十三　回向勝他章

夫れ光明眞言は大日如來大灌頂の神呪なるのみならず又阿彌陀如來の心中祕密呪にして殊に諸佛菩薩の總呪なり

此は光明眞言儀軌の文に由る大日如來大灌頂とは第八章の下に解釋するが如し神呪とは神は不測の義にして呪は眞言陀羅尼を云ふ是を以て祕藏記には呪者佛法未來漢地前有世間呪禁法能發神驗除災患今持此陀羅尼人能發神通除災患與呪禁法相似是故曰呪と述玉ふ又阿彌陀如來の心中祕密呪にしてとは光明眞言は大日彌陀両軀心中の祕密呪なるを云ひ殊に諸佛菩薩の總呪なりとは大日一佛の眞言に限るにも非ず亦大日彌陀両

軀心中の神咒に限るにも非ず諸佛菩薩に通ずる總眞言である
との意を云ふ
されば念誦の功德も亦隨て廣大無邊なるが故に設ひいかなる罪業深重の男女にても此功德を信じて唱ふる時は五智の光明に照されて往生淨土の素懷を遂げんと疑なき者なり
されば念誦の功德も亦隨て廣大無邊なるが故にとは如上に教示のある如く諸佛菩薩に通ずる眞言なる故に之を唱ふる功德も亦廣大無邊にして唯來世往生の利益あるのみならず現世安穩の利益まで蒙るとの意を云ふ設ひいかなる罪業深重なる男女にても等とはいかなる四重八重五無間の罪業深重の者といへども光明眞言の功德力を信じて唱ふれば五智の光明に照されて罪障を消滅する故に往生淨土の本懷を遂ぐると疑なしと
の意である

特に先亡得脫の爲に回向せんには此眞言に過ぎたる功德あるとなし
とりわけ先亡得脫の爲に回向するには光明眞言が勝るると云ふとは不空羂索經幷に光明眞言儀軌に說玉ふてある隨て元曉大師の遊心安樂道明惠上人の土砂勸進記等に具示しあるを見て知るべし
是故に經には爲死者此眞言誦一遍者必無量壽如來爲死者授手引導極樂淨土と說玉ひ
此は光明眞言儀軌の文なるゆゑに儀軌にはと云ふべきを經にはとあるは儀軌も通じて經と名くる義あるに由る爲死者とは先亡の爲にと云ふとにて信者の死せしは申すまでもなく佛とも法とも知ずして死せし者より二三歳を一期とし信心獲得せずして命終せし者までを。さして死者と云ふ此眞言誦一遍者と

は。亡者の爲に光明眞言を唱へて回向すると云ふ。必無量壽如來とは。必は必定。無量壽は梵に阿彌陀と云ふ。如來は常の如し。授手引導極樂淨土とは。亡者の手を引て極樂界に導き玉ふとの意を云ふ。此文の意によつて。眞言陀羅尼には。他力の中の他力まである。回向勝他の祕法なることを信知すべし

興教大師は。亡者の後世を助くる爲には。光明眞言尤も勝れたり。勸め易くして。而も一定後世の助かる法なりと。仰せられたり

此は孝養集の文にして。近くば野山名靈集二十五左に記載せり。文の中に尤もとは。いつちと諺譯す。勸め易くしてとは。淨と不淨とを擇ばず。行住座臥に唱ふるを云ふ。一定後世の助かる法なりとは。他作自受の理りあるを云ふ。一定は必定と云ふに同じ

既に先亡の爲に。唱ふる功德すら。是の如し。況や自唱ふる者は。往生淨土疑無しと。密教値遇の因緣を歡びて。怠りなく念誦相續致すべきなり

此は先亡得脫の功德を擧て。我等の念誦相續を勸め玉ふ。既に過去りし亡者の爲にと思ひとりて。之を唱へて回向すれば。斯處で唱へた功德を。先立つ亡者が受て離苦得脫する。他作自受の利益までである。最上無比の妙教なれば。自ら諦信して唱ふる者は。往生淨土の利益を蒙るとは疑なしと。密教値遇の因緣を歡び。念誦相續怠るべからずとの御教示である

第十四　他力易行章

眞言陀羅尼と申すは。法身如來自內證の法門にして。最上無比萬機普益の深教なれば。上は上根上智より。下は劣慧愚鈍の人。乃至盲聾瘖瘂の者までも。漏さず助け玉ふの。御法なり

眞言陀羅尼と申すはとは。第五陀羅尼藏と申すはの意である。法

身如來自內證の法門とは第十章に釋せしが如し上は上根上智よりとは一生に成佛する眞言正所被の機根を云ひ下は劣慧愚鈍の人とは未來成佛の因緣を結了する結緣機を云ふ乃至とは上下を兼て中を畧する詞にして越畧窮到の二義ある中今は佛とも法とも知らずして死する者なり二歳三歳を一期とし信心も獲得せずして命終する類を略して乃至と云ふゆゑ越略の義と知るべし盲聾瘖瘂の者までも漏さず助け玉ふの御法なりとは生れて法門きくとも唱ふるともならぬ四藏の教益に漏るる者までも助け玉ふの御法ゆゑ此御法の濟度に漏るる機根は一もあるとなし依て最上無比萬機普益の深教なればと述玉ふ故に興教大師は纔聞名字永離惡趣一經耳目忽超生死と述玉へり此は密嚴遺教錄一六右の文にして纔聞名字永離惡趣とは自ら眞言を唱ふるでなく只眞言の名字を聞た計りでさへも永く四惡趣を離るるとの意を云ふ一經耳目忽超生死とは眞言の聲を耳にきき眞言の名字を目に見た計りでさへも六道の生死を超るとを得るとの意を示し玉ふたる御文である

此は人の唱ふる眞言の聲を聞くすら一切の罪障を消滅すとの御垂訓なり況や自諦信して唱ふる時は十惡五逆等の種種の重罪も速疾に除滅して往生すると疑あるべからず

此は上に證示する所の興教大師の御釋に纔聞名字と一經耳目とある中且く耳根に經るるの一のみを承て教力の勝能を示し玉ふ自分が眞言を唱ふるでなく人の唱ふる所の眞言の聲を聞た計りでさへ罪障を消滅する功力あり況や自ら諦信決定して唱ふる時は餘教に於て救度すると能はざる十惡五逆等の重罪をも消滅して往生すると疑なしとの意である

特に在家の男女に於て最も辱きは光明眞言なり何となれば其身

の淨不淨を擇ばず常に之を唱へよとの佛祖の御示あるとなれば行住座臥に唱ふるも皆悉く往生の正因に非ずと云となし是れ誠に末世相應の他力易行の法門ならずや

此はとりわけ在家止住の男女の輩に於て歡ぶべきは光明眞言なるとを示し玉ふ其歡ぶべき譯と云ふは淨と不淨との擇びなく常に之を唱へよと佛祖の御許可あるは此眞言に限る故なり淨と不淨とを擇ばず行住座臥に念誦し得らるゝ之を易行と云ひ行住座臥に唱ふる眞言の功力が直に往生の正因となる之を他力と云ふ是の如く修し易く行じ易くして いかなる下根の人にでも相應する他力易行の法門までを末代に傳へ玉ふは實に歡ぶべきであるとの意を云ふ

されば士農工商は云はんもさらなり漁獵を家業とする者までも眞實懺悔の心を發し諦信して唱へ奉る時は其身其儘助け玉ふの深教なり

士農工商は士農工商の職を勤めながらに容易く往生を遂るとを得るのみならず漁獵を家業とする者までも眞言念誦の功力による時は罪障消滅して其身其儘助かるとの意を云ふ漁は海河にて魚を捕を云ひ獵は野山にて獸を取るを云ふ魚鳥を取るとは國法の制禁する所あれども家業渡世には少しも制禁はなきゆゑ國法にそむかずして宗意を示されたり

さればとて信心の領解違をして なすべき善事をも作さず なすまじき惡行を恣にし妄に罪を作りて遮惡修善の道理に戻るべからず

此は上に明し玉ふ眞言の大悲力に絶り何を作すも眞言さへ唱ふれば苦しからずと曲解する者を誡め玉ふされば とてとは しかあればとてと云ふ意にて上に漁獵を家業とする者までも其

身其儘助け玉ふの深教なりとあるを曲解して妄りに邪念を起し作すべき善事をも作さず作すべからざる悪行を恣にするは密教の流れに浴する信者に於ては以の外のことなりと深く誡め玉ふ之を能く了知するが吾宗信者に取ては至極肝要の心得である

十悪を止め十善を勤修すべきは人たるの道なれば後世を願わん程の人の踈に意得ざらんは本よりのことなれど

諸悪莫作諸善奉行は諸佛の通誡にして諸悪は十悪に攝し諸善は十善にとさむ十善は龍樹菩薩の大論には有佛無佛常有世間の戒とあつて佛の出世にもあれ又佛のいまだ出世し玉はざる以前にもあれ凡そ人界へ生を得たものは男女を論ぜず必ず踏み行ふべきの道なれば後世菩提を願ふ程のものは なを〳〵踈略にせざるは本よりのことであるとの意を云ふ

往生のことは唯大日如來の眞實誓願より末世の我等を助けんが爲に說玉ふ所の眞言不思議の教力を頼み奉るのみにて往生は決定と心得べきなり

大日如來の眞實誓願とは大日如來が光明眞言を說て親く觀音薩埵に與へ玉ふは卽ち一切衆生に與へ玉ふ意なれば我等未生已前に親く大日如來より授與に預るも同樣なるを云ふ往生の正因はかかる誓願深重の中より說玉ふ所の眞言不思議の教力を頼み奉るのみにあるとなれば此眞言を誦するに往生を得ずと云ふことは決定してあるべからずとの意である

第十五　女人往生章

女人は五障三從として身に障多くして佛法に入がたき由如來も說玉へり

五障とは法華經提婆達多品に又女人身猶有五障一者不得作梵天王二者帝釋三者魔王四者轉輪聖王五者佛身と説き玉ひ三從とは華嚴經に處女居家隨父母笄年適事夫從夫亡從子護嫌疑と説玉ふ是の如く内に五障あり外に三從ありて女人は佛法に入がたき器であるとの意を云ふ

五障といふは一には梵王二には帝釋三には魔王四には轉輪王五には佛身以上の五に成ると能はざるが故に障と説玉へるなり三從といふは幼時は父母に從ひ嫁しては夫に從ひ老ては子に從ふ是の如く一生終に其身を自由にすると能はざるの旨龍樹菩薩も仰せられたり

五障と名くる所以は或書に梵王淨行帝釋少欲魔王堅固輪王大仁佛具足萬德女人多染多欲懦弱妬害具足煩惱皆反於上故致五障と。あるによつて知るべし三從のとは大智度論第九十卷に見へたるゆゑに龍樹菩薩も仰せられたりと示してあるされば日夜に嫉妬の妄念を恣にし朝より夕に至るまで念ひと念ふ程のと悉く輪廻の因に非ざると無く作しと作す程のと皆墮獄の業に非ずと云となし

日夜に嫉妬の妄念を恣にし等とは意業について女人は嫉妬の妄念を恣にし日々夜々起す所の一々の念慮悉く輪回生死の因に非るとなしとの意を示し作しと作す程のと皆墮獄の業に非ずと云となしとは身業について行住座臥に亘る日夜の所作悉く墮獄の業に非るとなしとの旨を示す

かく輪廻生死の業のみを造りて佛法にはますます遠ざかる女人の身も眞言經王の功德にては罪業消滅して速に淨土に往生せらるるなり

是の如く身意二業に渉り輪回の因生死の業のみを造り内に五

障あり外に三從あつて。佛法値遇の緣薄き女人といへども。眞言の教力不思議による時は。罪障消滅して往生するとを得るとの意である

是を以て興教大師は。破戒僧尼必得往生。造惡男女定生極樂と述玉へり

此は密嚴諸祕釋三二十右御文にして一度殺生。偷盜。邪婬。妄語の。四重禁を破する時は。いかに懺悔すといへども。其罪障消滅するとは能はずと云ふは。法相宗三論宗等の權門の所談なれども。祕密一乘の教法は教益甚深なるゆゑ。諦信して眞言を念誦する時は。破戒の罪障を消滅し玉ふのゆゑ。破戒僧尼必得往生と示し玉ふ。かく破戒の僧尼すら。懺悔して眞言を念誦する時は必得往生の巨益あり。況て信心の男女之を唱ふる時は。いかに造惡は厚きも。往生淨土の益を得ずと云ふとあるとなし。故に造惡男女定生極樂と述玉ふ。但造惡の惡に。已造の惡と未造の惡とある。其中今は已造の惡について云ふとにして。決して未造の惡について云ふとには。非ずと了知して。難思議の法を誤解して。邪見に墮せざるよう。深く注意すべし

是故に諦信決定する時は。いかなる女人といへども。必ず有緣の淨土に往生せんと。疑あるべからず

眞言には破戒の僧尼より造惡の男女まで。共に助くる所の功力ありといへども。勤むる行人に諦信決定なければ。其益あるとなし。譬へば火はものを燒くと云ふとを知り辨へ居ても。火に觸ねば燒けぬ如く。眞言陀羅尼には罪障消滅の益ありといへども。念誦せざれば其益あるとなし。さればいかなる罪業深重の者も助け玉ふと。諦信決定して眞言を唱ふれば。內外の障りある五障三從の女人といへども。變成男子の益を得て。西方なり都率なり其

他有縁の淨土に往生すると疑なしとの意を云ふ

是蓋し眞言教力の不思議にして化益甚深の致す所と厚く信じて怠りなく眞言念誦相續し往生淨土を願ふべきなり

罪業深重なる女人が後生助かると云ふは自分が修する所の力によるにあらず偏に教益甚深の勝能を備へたる眞言の教力不思議によると深く信じて懈怠なく日日眞言念誦相續が肝要であるとの旨を示し玉ふ

第十六　女人成佛章

女人成佛のことは何れの宗にも其沙汰あるとなれど皆女人は五障の雲深ければ其身其儘にては佛に成りがたき者なりと云へり

女人成佛のことは何れの宗にも其沙汰あるとなれどことは沙はすな石はいしと撰り分け物を吟味しわけをただすを沙汰と云ふ

即ち詳議撰擇する義にして女人が成佛するは其身其儘か或は變成男子かと何れの宗に於ても詳議撰擇するを云ふ皆女人は五障の雲深ければ等とは女人は皆外に五障あるゆゑ吾密宗を除くの外は何れの宗にても其身其儘にては成佛すると能はずと談ずるとの旨を示す

是故に釋尊出世の本懷とも云る法華經にも龍女成佛を說玉へども猶も變成男子にてのとなり

此は法華經提婆達多品に當時衆會皆見龍女忽然之間變成男子具菩薩行即往南方無垢世界坐寶蓮華成等正覺とある經意による是れ龍女の其身其儘の成佛に非ずして變成男子なると明かである猶其成佛と云ふも究竟じたる妙覺果滿の成佛に非ずして初住分證の成佛と知るべし

又阿彌陀如來超世の悲願にも同じく變成男子と建て玉へり

阿彌陀如來四十八願の中。第三十五に女人成佛の願あれども。其身其儘の成佛に非ずして。是亦變成男子とす。變成男子と建て玉へりの一句は。親鸞聖人の淨土和讃に。變成男子の願を立て。女人成佛誓ひたりとあるに異なるとなし。されば第三十五の女人成佛の願も。女の其身其儘の成佛に非ずして。變成男子なると明かである

然るを吾宗にては。一切衆生の色心の實相は。常に是れ毘盧遮那の平等智身にして。皆是れ六大の所成なりと談ずるが故に。女人とても。此平等智身六大所成の外なければ。皆悉く成佛せらるるなり

如上は顯家所談の義を明し。已下は正く密宗不共の義を示す。一切衆生の色心の實相とは。法爾の衆生は諸佛と常同なるを云ふ。常に是れ毘盧遮那の平等智身にしてとは。智は諸佛無漏の識大にして。身は前五大を云ふ。毘盧遮那與鬼畜其身平等と談ずる宗意なる故に。一切衆生悉く毘盧遮那の平等智身にして。皆六大の所成なれば。女人も其身其儘にて。成佛すと云ふ旨を示されたり

是を以て高祖大師は。若有信修不論男女皆是其人と仰せられたり

此は性靈集第十卷の御文にして。若有信修とは若は不定の辭。信は諦信修は修行にして。如說に諦信し修行する者あれば。男女貴賤を論ぜず。悉く成佛する所の器なりとの仰せである

さればいかに五障の罪深くとも。祕密灌頂の壇に入り。三平等句の法を受け。機教相應する時は。速に成佛することを得るは。獨密教不共の談にして。他門の知らざる深趣なり

祕密灌頂の壇に入りとは。結緣灌頂にも非ず。亦受明灌頂にも非ずして。傳法灌頂に入壇するを云ふ。然るに女人に傳法灌頂を授與するとは。野澤の諸流には無き姿なれども。獨菩薩流にのみありと知るべし。三平等句の法を受けとは。三平等は心佛衆生に非

ずして。大日經の身語意平等句法門をさす。句には大日經疏に。進行の義と住處の義との二義あり。吾宗の行者は行果共に三密平等の外なければ。三密平等の行を精進修行して。三密平等の果位に安住するの義を示して句と云ふ。機教相應する時は速に成佛するとを得るは等とは。能被の教と所被の機と相應する。上根勝慧の女人に付ての沙汰にして。下根劣慧の女人を云ふに非ず。是れ今家獨談の妙旨にして。他門の人師は。曉の夢にも知らざる。甚深の祕趣であるとの意を云ふ

かかる不思議の深教なるが故に。假令劣慧の女人たりとも。此尊き御法を信知して。專ら光明眞言を唱ふれば。往生淨土疑なしと。安心決定致すべきなり

如上は正く上根勝慧に付て。女人成佛の義を明じ。已下は因に下根劣慧の女人に付て。順次往生の旨を示す。かかるとはかくあると云ふ意にして。假令とはよしんばと云ふに同じ。信知してとは煩惱未斷の衆生までも。誦呪の功力によつて。導き玉ふと知るを云ふ。下根劣慧の女人は。此生に於て成佛すると能はざれども。專ら光明眞言を念誦相續すれば。順次往生は疑なしと。安心決定すべしとの御教示である

第十七　高祖哲願章

我等今この人界に生れ來れども。前身は未だいかなる形にてありしと云ことを知らず。去て冥路に入らんと欲すれば。後生亦いかなる果報ぞや

我等今このより得度の船誰をか憑まんと云ふまでは。全く密嚴諸祕釋二十八右地藏講式の文による。我等今この人界に生れ來れども等とは。我等幸に人界へ生を受くるといへども。隔生卽忘の

故に過去を顧れば冥々として其首めを見ず生れ生れて生の始めに暗くして前生はいかなる形にてありしやを知らずとの意を云ひ去て冥路に入らんと欲すれば已下は未來に臨めば漠々として其尾りを尋ねず死に死んで死の終りに冥きを云ふ

久しく眼前の妄境に迷ひ徒に夢中の名利に走りて三業四威儀常に惡趣の業因を造らずと云となし悲しひかな生死の海漫々たり哀なるかな得度の船誰をか憑まん

凡夫は善惡に盲ひて因果應報の眞理を信知すると能はざる故に久遠劫より只眼前の境界にのみ迷ひ一生は夢幻の如き世中なるを辨へず名聞利養のみを得んとして東西に奔走し身口意の三業に渉り行住座臥の四威儀に經て惡趣の業因のみを造るとの意を云ふ悲しひかな生死の海漫々たりとは生死流轉の業のみを造るゆゑ此に死しては彼に生し彼に死しては此に生す

生死の大海涯際なきゆゑに漫々たりと云ふ漫々は廣大にして際限なき姿を云ふ哀なるかな得度の船誰をか憑まんとは渺々たる生死の大海を渡て淨土の彼岸に至らんとするには船に非ずんば能わず誰を憑んで得度の船とせんと云ふ意である

爰に有緣の聖者ましませり其御名を遍照金剛と申し奉る

有緣の聖者とは高祖大師をさすとは必定なれども有緣の聖者と稱する所以は室戸の緣起に天竺に在ては勝鬘夫人と名け震旦に於て廬山の惠思禪師と名け大峯に於て役優婆塞と名け葛城に於て法起菩薩と名く前生には上宮太子と云ひ今世には空海と云ふとあつて吾國に御結緣の深きを以て有緣の聖者と云ふ遍照金剛とは大師十號の中の隨一にして登壇散華の金剛號なり祖師寶號の深旨は在家勤行法則の和解を見て知るべし

特に四藏の教藥に漏たる惡趣の衆生を助けんが爲に華臺の樂を

捨て、利生の門に出玉ひ

此は素怛纜藏。毘奈耶藏。阿毘達磨藏。般若藏と云ふ。前四藏の教法の化益に漏るる。惡趣の衆生までも。助けんが爲にと云ふ。文の相なれども。實は念佛の化益に漏るる。盲聾瘖瘂の輩より。誹謗正法の惡趣の衆生までも。助けんが爲にの意である。華臺の樂を捨て利生の門に出玉ひとは。從果向因の義にして。中臺の大日覺王。華臺の自樂を捨て。利益衆生の爲に。世に出興し玉ふを云ふ。例せば念佛門に。往還二相ある中の。還相回向の如きを云ふ

專ら眞言密教を弘通して。終に肉身を此土に留め玉ふ

人皇五十代桓武天皇の御宇。延曆二十三年に。高祖大師は三十一歳にして入唐し。三十三歳まで彼の國に錫を留め玉ひて。長安城青龍寺惠果阿遮梨より。眞言祕密の教法を悉く傳へ玉ひ。大同元年御歸朝の後。二十有餘年の間國の爲衆生の爲に。傳ふる所の金剛一乘の教法を。日本全國に弘通して。終に六十二歳を一期とし。承和二年三月二十一日に。高野の樹下に入定留身し玉ふを云ふ

其御誓願に曰。虛空盡き衆生盡き涅槃盡きなば。吾願も盡きなんとかくの如き大誓願を發し玉ひ

此は萬燈會の願文に。華嚴經の十無盡によつて。誓ひ玉ふ所の御辭である。虛空も衆生も盡きるものではなく。亦涅槃も盡きるものではなひ。然るを虛空も衆生も亦涅槃も盡きなば。吾願も盡きなんと仰せられしは。御誓願の深重にして。且廣大なるとを述玉ひしとと知るべし

二佛中間の我等をば。必ず濟度し盡さんと。遠く龍華三會の曉まで入定留身し玉ひて

此は前佛の釋迦既に入滅し。後佛の彌勒未だ下生し玉はざる。二佛中間の衆生を。悉く濟度し盡さんが爲に。入定留身ましますと

の意である。龍華三會の曉とは。彌勒菩薩都率天の定壽四千年盡て。(都率天の四千年は凡そ人界の五十六億七千萬歲に當る)此界の衆生八萬四千歲の時下生して。龍華菩提樹の下に於て。正覺を成じ玉ひ。三會の說法をなし玉ふに。初會に九十六億。二會に九十四億。三會に九十二億の衆生。彌勒慈尊に値遇し奉りて。得道するを云ふ。此旨彌勒下生成佛經等に具に說き玉ふてある

拔苦は輕重を問はず。與樂は親疎を論せず。齊しく助け玉ふの御誓願なれば。末世の衆生自他共に眞言念誦を勵まし。値遇の勝緣を仰ぎ往生淨土を願ふべきなり

大悲苦を拔き玉ふも。輕重を問ふとなく。大慈樂を與へ玉ふも。親疎を論ずるとなくして。齊しく助け玉ふ。一味平等の御誓願なれば自他宗の道俗男女共に。誦咒の功力によつて。値遇の勝緣を結び往生淨土を願ふべしとの結示である

第十八　正御影供章

毎年三月廿一日は。高祖大師御入定の正忌なれば。吾宗に於ては。例供として。慇重に法樂を擎げ奉る。是を正御影供と稱す

毎年三月廿一日は。高祖大師の入定留身し玉ひし御正忌に付。宗內の遺弟等例供として謹で勤修する。之を正御影供と稱するとの意を云ふ。例供とは例年の供養と云ふ意にして。慇重はねんごろと訓じて。こころねを盡してと云ふことである。法樂を擎げ奉るとは法樂は法味と云ふが如し。擎げは指上を約めて云ふ。約音語である

特にそのかみ。延喜の帝。永世の恒規として。勤むべきの詔を。下し玉ひし所の法會なり

宗內の遺弟等尊崇して。例年勤修するのみならず。延喜十年三月

廿一日に勅して觀賢僧正に修せしめ玉ひ。同六月廿七日に。今より已後永世の恒規として。總本山教王護國寺に於て。正御影供を勤修すべしと。宣下し玉ふ所の法會であるとの意を云ふ

されば本寺本山は申すに及ばず。在在處處の寺院を始め。在家男女の輩に至るまで。前七箇日の間。殊に香華を供じ。知恩報恩の誠を竭すべし

本寺は總本山教王護國寺をさし本山は各大本山をさす。在在處處の寺院とは。在所在所の寺院と云ふ義にて。本寺本山の直末孫末を云ひ。在家男女の輩とは。直末孫末の檀徒信徒を云ふ前七箇日の間とは。十五日より廿一日までに當る。殊に香華を供じ知恩報恩の誠を竭すべしとは。心地觀經に。知恩報恩是聖道とあれば各自の分限に應じて。香華燈明飯食等の供具を擎て。報恩謝德の誠を竭すべしとの意である

抑いろはの假字を作りて。貴賤古今に亘り。廣く利益を施し玉ひしを始め。最上無比の眞言密教を。此土に弘通して。鎮護國家の巨益を施し。往生成佛の大利を得せしめ玉ふと。是れ皆高祖大師の。御恩德に非ずといふことなし

伊呂波は。高祖大師の御製作にして。童蒙筆學の初門とするの利益のみならず。涅槃經に諸行無常。是生滅法。生滅滅已。寂滅爲樂とある。四句の偈文の和解なれば。生死を解脱する入道の初門にして。貴賤を問はず男女を論ぜず廣く世間出世間の益を蒙るも。最上無比の眞言を念誦する時は。人々各々の罪障を消滅するゆゑに。災障を攘ひ病惱を除く現益を得るも。三國相承の如意寶珠を室生山に納めて。鎮護國家の巨益を施し玉ふ所の冥益を蒙るも。下根劣慧の人。誦咒の功力によつて。往生淨土の益を得るも。上根勝慧の人。五相三密の觀行を修して。卽身成佛の大益を得るも。皆

悉く高祖大師の御恩德に非るとなしとの意である

恩を受て恩を知らざる者は禽獸に等しと佛も誡め玉へる所なれば老若男女の差別なく七箇日の間法筵に列り高祖大師の御影前にて各報恩の誠を效し我身の罪業を發露し奉り不信の者は信心を發し未安心の者は安心を決定し信者は益信心を堅固に致すべし かくの如く勤むるを報恩謝德の本意とす

此は顯密大小の諸經に說き玉ふてあるを取意して恩を受て恩を知らざる者は禽獸に等しと教示し玉ふ是を以て龍樹菩薩は智度論に不知恩者甚於禽獸と述玉ひ亦興教大師も密嚴諸祕釋五十左に受恩不知者不異禽獸蒙訓不報者相同木石と仰せられたりされば廣大無邊なる現當二世の御恩を受たる吾等が身の上は正御影供の前七箇日の間に法義を聽聞し御影前に香華を供じて報恩謝德の誠を盡し去年の正御影供後より今年の正御影供までの間に造りし罪業を發露懺悔して不信懈怠の者は信心を發起し未安心の者は安心決定し安心決定せし信者はいよいよ信心を堅固にするを以て報恩謝德の爲に正御影供を勤修するの本意とするとの示しである

而して其上は各能く眞俗二諦相依相成の宗意を領解して外には十善の大道を履行ひ內には如來加持の本誓を仰信し

眞俗二諦のことは宗々の所傳によつて種々不同ありといへども多くは世間門を以て俗諦とし出世間門を以て眞諦とす吾宗にては亦同く眞俗二諦は世間出世に分つといへども一往再往の兩義あり一往の義にては王法正論治國之要と稱する人の人たる十善の大道を踏み行ふを以て俗諦門とし白淨信心決定して往生下根成佛上根するを以て眞諦門とす再往の　にては俗諦の所に眞諦の義あり眞諦の所に俗諦の義ありとす俗諦の所に眞諦

の義ありとは。慈雲尊者の法語に。此法ちかくは人となる道にして。遠くは佛の萬德を成就するなりとある如く。十善を全ふ持つ所に。佛の萬德を成就する。是れ俗諦の所に卽して眞諦の義ある所以なり。又眞諦の所に俗諦の義ありとは。往生成佛を期して。眞言を念誦する時は。教力の勝能によつて。人々各々に業障を消滅するゆゑに。自ら災障を拂ひ病惱を除き。風雨順時五穀豐熟等の。鎭護國家の巨益を得る。是れ眞諦の所に卽して俗諦の義ある所以なり。是の如く吾宗には一往再往の二意あるとを知らしめ。眞俗二諦は烏の兩翼車の兩輪の如くに並べ行ふて。王法佛法の制禁に背かざるよう。眞俗二諦相依相成の宗意を。實際に履行せしむるを肝要とす。但此には一往の義のみを示し。眞諦を明すにも內には如來加持の本誓を仰信しとあれば。且く下根劣慧の人のみについて。教示し玉ふと知るべし

後に列ぬる五箇の條目をも。堅く相守り。名聞利養を打捨て。偏に後生菩提を祈り。眞言念誦を勵ます。是を眞實の眞言行者と申すべきなり

後に列ぬる五箇の條目をも堅く相守りとは。眞言密宗の流れを汲む者は。道俗男女共に。後に列ぬある五箇の條目を堅く相守りて。王法佛法の制禁に背かざるようにするを。肝要とするとの意である。名聞利養を打捨てとは。名譽を求め世の聞えを願ふは名聞にして。財利を貪るを以て樂とするは利養なり。何れも佛法の本意に非るゆゑに打捨てと云ふ。偏に後生菩提を祈りとは。機教相應門の一生に佛果菩提を求るに對して。教益甚深門は生後の菩提を求るゆゑ後生と云ふ。菩提はこれ佛果の名。淨土に往生して後。菩提に至るを後生菩提と云ふ。是れ下根劣慧の人に付ての御教示なると明なり。是を眞實の眞言行者と申すべきなりとは。

是を眞實下根劣慧の眞言行者と申すべきなりの意と知るべし

第十九　大師恩德章

つらつら高祖大師の御入定を顧みれば既に千有餘年の古又出定期限を數ふれば五十六億遙なり

高祖大師の御入定を顧みれば既に千有餘年の古とは高祖大師六十二歳の御時承和二年三月二十一日に入定留身し玉ひしを當書御製作の明治十七年より顧みれば既に一千五十年以前に當るとの意を云ふ又出定期限を數ふれば五十六億遙なりとは高祖大師の出定し玉ふ期限は五十六億七千萬歳の末當來能化彌勒慈尊下生の時にて今よりは遙かに遠しとの意である此五十六億七千萬歳の數は都率天の壽命に付て云ふ都率天は人間界の四百年を一晝夜として四千年の定壽なれば四百年を一年の日數三百六十合すれば十四萬四千年となる此十四萬四千年を都率の壽數四千とすれば五十七億六千萬歳となるを古より五十六億七千萬歳と稱し來れり此は菩薩處胎經及び賢愚經に五十六億七千萬歳と說き玉ふてあるに由る然るに是の如く彌勒菩薩實に都率天の果報を得其業盡て後下生し成佛し玉ふかと云ふに大小乘の說く所同じからず小乘にては實業實果とすれども大乘にては實業實果に非ずして化現とす實は久遠劫の昔に成佛し玉へども化他の爲に現ずる所の佛身なるが故に所化の機根の純熟を天上にて待玉ひ機の熟するを見て下生し玉ふとするなり因に都率に二種の不同あるとを述れば一には有漏業果の所成之を總報天と名く三災大劫の火災の時に壞滅する欲界の天なり此處は願ふ處に非ず二には無漏報の所成之を別報天と名く首楞嚴經に不接下界諸人天境乃至劫壞三災不及

如是一類名兜率陀天と說玉ふ。是れ卽ち彌勒菩薩の淨土にして。吾宗に十方淨土を勸誘する中の。都率の淨土と云ふは。此彌勒菩薩の淨土を指すと知るべし

然りと雖。悲願深重なれば。日日微雲管の裡より。末世行者の信否を鑑み玉ふが故に。三業の淨信を凝せば。在世に異なるとなく。二世の勝益に預るのみならず

然りと雖。悲願深重なれば日日微雲管の裡よりとは。高祖大師肉身を高野の樹下に留め玉ふといへども。神を都率內院の淨土に遊ばしめて。十方有緣の衆生を濟度し玉ふを云ふ。微雲管は都率內院の淨土をさす。都率は寶雲上の淨國なるゆゑに微雲と云ふ。管は和歌八重垣にくたかけ東國には家と云ふとあり。末世行者の信否を鑑み玉ふが故にとは。誕生會法則の和讃に。微雲管の中よりも。末資の信否を鑑みて。信には禍與ふべし。不信は禍多からむとあるに由る。三業の淨信を凝せば在世に異なるとなく等とは。三業は身口意を云ひ。淨信は白淨信心のことにして。凝らせばは心を一境に止るを云ふ。三業の淨信を凝し心を一境に止めて。眞言念誦相續する時は。高祖大師の御在世に異なるとなく。現當二世の利益を蒙ることを得るとの意である

彼の諸佛の方便に漏れたる。無佛世界の衆生までも。餘さず助けんが爲に。金剛不壞の定身を。此土に留め玉ひ。日日處處の遺跡に分身散影して。無窮の應用を垂れ玉ふ

彼の諸佛の方便に漏れたるとは。顯の諸佛の方便に漏れたるとの意を云ふ

云ふ。文の相なれども。實は彌陀の化益に漏れたるとの意を云ふ

無佛世界の衆生までも餘さず助けんが爲に金剛不壞の定身を此土に留め玉ひとは。大乘同性經の意によるに。釋迦牟尼世尊御入滅の後。初一千年の間。解あり行あり證果ありと云ふ。正き世

の中なるゆゑに正法と云ふ。次の一千年の間は。正法に像る世と云ふ義にして像法と云ふ。是れは解あり行あり證果なき世の中なり。後の一萬年の間は。解あり行なく證果なしと云ふ。世の中なる故に末法と云ふ。此正像末の一萬二千年を過去る時は。一切の佛法滅盡すとあり。此時に生を受たる衆生は。佛名をも聞くと能はざるゆゑに。無佛世界の衆生と云ふ。然るに彌陀の本願勝れましますゆゑに。經には特留此經止住百歳とあつて。念佛の法門は百年の間永く此土に留り玉ふ。されば一萬二千年と。特留此經止住百歳とある。百年とをすぎ去る時は。いよいよ南無佛と云ふ聲をも聞く事のならぬ世界となる。此時を眞の無佛世界の衆生と云ふ。此無佛世界の衆生までも。洩らさず助けんが爲に。吾高祖大師は金剛不壞の定身を此土に留めて。正像末の三時の異を論ずるとなき。三世常恒の御法を以て。攝化利生し玉ふを云ふ。之を以て高祖大師の恩德廣大なるとを信知すべし。日日處處の遺跡に分身散影して無窮の應用を垂れ玉ふとは。弘法大師法鏡錄に。「此教望二世悉地者。空海日日到彼房中當擁護行者。故寫我形像安置所在。如世尊之形像可歸敬之」とあるに依る。寺院俗家に限らず。繪像木像の安置しある處を。高祖大師は我が遺跡として。月の萬水に印ずるが如くに。百億の化身を下して。日日影向し玉ふとの意を云ふ

是故に。御誓願の言葉にも。我後生之門徒。縱雖不見我現相。毎見我形像。生眞相之想。毎聞我教。住我言音思。我以定慧力。攝取不捨との玉へり

此は高祖大師御入定已前に。高野山の第二世眞然大德へ遺告し玉ふ。七箇條の御誓願の中。第三箇條目の御文にして。近くば遊方記にあり。我後生之門徒とは。我は大師の御自稱。門徒は同門徒弟

の義にして。弟子と云ふが如し。出家在家共に眞言誦咒の功力を仰ぐ輩を云ふ。縱雖不見我現相とは。高祖大師御入定より千有餘年の後に。生を受たる吾等が身上なれば。現身の相好を拜し奉らずといへどもの意にして。毎見我形像生眞相之想とは。畫像木像の繪の形像を拜する毎に。眞身相好の觀念を生ぜしめよとの意である。毎聞我教住我言音思我以定慧力攝取不捨とは。一句一文を末代の凡僧より傳へ聞く毎に。高祖大師の言音の思ひに住して。如說に信修する時は。定慧の御手を以て攝取して捨玉はずとの。慈悲深重の御誓願なるを云ふ

されば今吾等。假令一句の法音を聞くも。祖師言音の思をなし。尊影に向ひては。眞相を拜し奉るの想に住して。眞言念誦相續すれば。攝取の利益に預り。有緣の淨土に往生せんと。疑なしと。深く信ずべきなり

法燈を末代に傳持する所の法師に從ひ。一文一句の法話を聞くも。高祖大師の言音であるとの思ひをなして。大切に法義を聽聞し。又畫像木像の尊影に向ひては。生身の高祖大師を拜し奉るの思ひになりて。眞言念誦相續する時は。攝取不捨の勝益を蒙り。十方淨土何れなりとも緣に任せて。往生することを得るものなりと。深く諦信決定すべしとの意である

第二十　密教殊勝章

我等は佛前佛後に生れて。出離解脫の因緣もなく。悲しみても亦悲しむべきは。佛世に漏れたるの悲み。恨みても猶恨むべきは。苦海に沈めるの恨なり

我等はより五濁濫漫の邊地に來れりと云ふまでは。全く解脫上人の愚迷發心集の文による。我等は佛前佛後に生れてとは。佛前

は彌勒菩薩下生のまへ。佛後は釋尊入滅の後なるを云ふ出離解脫の因緣もなくとは。凡そ生死を解脫するとは。偏に値佛聞法の緣による。然るに吾等は果報拙くして。二佛の中間に生れ來りて。値佛聞法の緣をかぐとの意を云ふ。悲しみていも亦悲しむべきは佛世に漏れたるの悲みとは。釋迦牟尼佛の御在世に漏れ。彌勒慈尊下生の時。未だ至らざるを云ふ。恨みていも猶恨むべきは苦海に沈めるの恨なりとは。値佛聞法の緣なきゆゑに。冥路より冥路に入りて苦海に沈み。出離生死の期限なきを云ふ

まして曠劫より以來。今に至るまで。惑業深重にして。既に十方恒沙の佛國にも生ぜず。罪障猶厚くして。今又五濁濫漫の邊地に來れり此は曠遠の時より惑業により。生死に流轉して十方淨土に生ずると能はず。罪障厚くして。五濁濫漫の世に生れ來りしとの意を云ふ。因に五濁の名義を示さば。五濁とは。劫濁。見濁。煩惱濁。衆生濁。命濁を云ふ。劫濁とは。劫は時分と翻じて。時世の衰へ濁るを云ふ。上世人壽八萬歲より三萬歲に至るを清世と云ひ。三萬歲より已後を濁世と云ふ。此は下の四濁によつて名稱を立つ。譬へば淨き器に不淨を入れし如く。世は清淨なれども。中間に處する衆生の所作。穢れ不淨なるによつて。清き器世間も自ら濁りの世となる是を劫濁と云ふ。見濁とは。五利使を體とし。見とみ違ひするを云ふ。五利使とは。身見。邊見。邪見。見取見。戒禁取見を云ふ。身見は。我我所を計して。四大假集を我と計し有と執するを云ふ。邊見は。斷常二見に墮し。無常の娑婆を常住と思ひ。地獄極樂もなしと計するを云ふ。邪見は。因果撥無として。善惡の因に善惡の果なしと計して。善惡の果報を怖れざるを云ふ。見取見は。麁執爲勝として。自身の劣れるを勝れりとし。他の勝れるを劣れりと計するを云ふ。戒禁取見は。非因計因として。雞狗等の戒を持ち苦修難行し。我能く持戒し

行法すと計するを云ふ。善戒經に曰く。今の衆生の如きは。非法を法と見。法を非法と見。法を非法と說き。非法を法と說き。不正見を以て妄りに分別を生し。正法を破壞し邪法を增長し。他をして修習せしむ。故に見濁と名くと。煩惱濁とは。五鈍使を體とし。諸惡造作を云ふ。五鈍使とは。貪使。瞋使。癡使。慢使。疑使を云ふ。貪使は。物に愛着を生し捨離ずると能はざるを云ふ。瞋使は。事物我情に適せざれば。恚根を生じ忍受すると能はざるを云ふ。癡使は。是非善惡の差別を分別する知慮なきを云ふ。慢使は。我を高擧して他を侮り謙遜禮讓なきを云ふ。疑使は。有無の決了なく誠信を立てると能はざるを云ふ。是の如きを五鈍使と云ふ。三毒心に在りて能く煩惱を生じ。種々の惡業を造作せしむ。是を煩惱濁と云ふ。衆生濁とは。不義不善を云ふ。衆生恩を忘れ義に背き。父母に孝養の心なく。師長に奉事の道を失し。所作の業皆不善業のみ。是を衆生濁と云ふ。命濁とは。短命。夭壽を云ふ。衆生五欲增長して。不善業を成し。爲めに不慮の禍に逢ふ。隨て色心連時の命も自ら短ふす。卽ち上みの人壽八萬歲より。下既に今日百歲に滿たざる縮命に至りたり。是を命濁と云ふ

かく薄福重障なりと雖。非昌地。難得遇此法。之不易也と稱歎し玉ひし。金剛一乘の教法に遇ひ奉り。辱くも此度。出離解脫の時を期することを得るは今生の歡。何事か之に如かん

かくとは是の如くと云ふに同じ。薄福とは惑業深重にして十方恒沙の佛國に生ぜざるを云ひ。重障とは罪業猶厚くして五濁濫漫の世に來れるを云ふ。非胃地難得遇此法不易也とは。惠果和尙の御辭にして。性靈集第二にあり。此は往生成佛の難きに非ず。祕密甚深の教法に遇ふとが難しとの意である。金剛一乘の教法に遇ひ奉り等とは。我等は薄福重障なれども。幸にかかる難値難聞

の。金剛一乘の教法に遇ひ奉りしが。出離解脱の時を得たと云ふものにして。今生の歡び之にしくはなしとの意である

抑此密宗教意の殊勝なる旨をいはば。能說の教主既に諸佛の本祖にして。三世常恒の大日如來なるが故に。其所說の眞言も。亦是法爾常恒にして。一切佛法の本體なり

成佛の遲速は教の權實による。教の權實は教主の尊卑による。教主の尊卑は機感の不同に由ると云ふが。自宗教判の定義なる時。密教能說の教主は三世諸佛の祖師にして。三世常住の法身佛なるゆゑに。所說の眞言密教も亦法爾常恒にして。一切佛法の本體であるとの意を示し玉ふ

されば餘教に云が如く。正像末の三時の異を。論ずるとなし。故に假令今の世といへども。上根勝慧の者ありて。如說に修行する時は。一生に成佛するとを得るなり

顯教には。正法千年。像法千年。末法萬年と。云ふ三時の不同を說き。教あり行あり證果ある之を正法とし。教あり行あり證果なき之を像法とし。教あり行なく證果なき之を末法と名くと。大乘同性經善見論等に見へたり。かく顯教には。正像末の三時の異を立れども。密教には行證共に時を揀ばざるゆゑ。三時の異を論ずるとなし。依て像末の世といへども。上根勝慧の人あつて。如說に修行する時は。一念一時一生に成佛するとを得るとの意である

是を以て高祖大師は。人法法爾。興廢何時。機根絕絕。正像何分と述玉へり

此は梵網經開題の御文にして。人法法爾興廢何時とは。眞言密教は三世常住にして。能說の人も所說の法も。共に法爾常住にして。興廢を論ずると無しとの意を云ひ。機根絕絕正像何分とは。能被の教法のみならず。所被の機根も信修する時。卽正法なれば像末

の世といへども證果空しからざるゆゑに三時の異を分つとなしとの意である

かかる尊き御法ゆゑいかなる下根劣慧の者と雖大悲教益の殊勝なるに往生の信を決定する時は順次往生は更に疑なき者なり

如上に教示のある如く上根上智の人あつて如說に修行する時は正像末の異を論することなく一生に成佛することを得と云ふ尊き教法ゆゑ設ひ下根劣慧の人たりとも諦信決定して念誦相續する時は順次往生を遂ぐることは更に疑なしとの意である

第廿一　眞言得名章

凡そ宗名を立るに宗祖の意樂區にして祖師所住の土に寄て名づくる有り或は祖師の名稱を取て名づくる有り又は所依の經論に就て名づくる等種々ありと雖皆是れ人師の假說なり

凡そ宗名を立るに宗祖の意樂區にしてとは宗名を建立するに各宗祖師の素意各別なるを云ふ祖師所住の土に寄て名づくるとは天台宗と云ふが如し此は大隋國清寺の智者禪師天台山に棲身して教觀を弘通し終に入寂し玉ふゆゑ祖師所住の土に從へて宗名を立つ或は祖師の名稱を取て名づくる有りとは日蓮宗と云ふが如し此は其宗門を弘通し玉ふ所の祖師の名稱に由て宗名を設く又は所依の經論に就て名づくるとは華嚴宗三論宗と云ふが如し此外數多の宗名あるゆゑに等と云ひ種々ありと雖も云ふ何れも佛直說の宗名に非ず末世の私建にして人師の假說である

然るに吾眞言宗と云は金剛頂瑜伽分別聖位經に眞言陀羅尼宗者是一切如來祕奥之教自覺證智修證法門と說き玉ふ所の宗名にして隨他假說の稱に非ず

金剛頂瑜伽分別聖位經にとは佛自ら宗名を說き玉ふてある經の題目を示し眞言陀羅尼宗者とは如來の言說は眞實にして虛妄なきゆゑ眞言と云ひ陀羅尼此には總持と翻じて萬法を收めたる宗なると云ふ一切如來とは五智如來をさし祕奧之教とは祕密深奧の教と云ふ義にして五佛の祕法を說て諸法の奧義を顯すを云ひ自覺證智修證法門とは化他の方便に簡ふ其中自覺證智は自心が自心を知る大聖の智慧と云ふ義にして如來所證の五智三十七智等を云ひ修證法門は五智三十七智等を修習證得する五相三密の法門と云ふ意である

且此宗の教意は三密の妙行を修して一生に成佛するを以て正意とするが故に三密宗と名づべきを如來とさらに眞言宗と名づけ玉ふは深く所以あるとなり

吾宗は三密の妙行によつて三密醍醐の妙果を證得する教意なるゆゑ宗名をも三密宗と稱すべきに佛自ら眞言宗と說き玉ふには深き所以あるとの意を云ふ

何となれば餘教は皆是れ四言所說の教法なれども今眞言宗教は如義眞實語の所說なるが故に佛みづから宗名を眞言陀羅尼宗と說玉へるなり

此は龍樹菩薩所造の釋論に前四言說虛妄說故不能談眞後一言說如實說故得談眞理とある御釋の意に由る餘教はとは顯乘諸宗の一切の諸教を指す皆是れ四言所說の教法なれどもとは相言說夢言說妄執言說無始言說の所說なるを云ふ今眞言宗教は如義眞實語の所說なるが故に等とは眞言宗教は前四妄の言說を離れて第五の如義眞實語を以て說き玉ふゆゑに眞言陀羅尼宗と稱すとの意である因に五種言說のことを畧示せば相と云ひ夢と云ひ妄と云ひ無始と云ふは世間所發の言語種類無邊なる

も。因縁に依らざるもの無し。中に於て現在諸色の相を緣じて起す言語を。相言說と云ひ。過去已經の事を緣じて起す言語を。夢言說と云ふ。別して宿怨の事を念じて起す言語を。妄執言說と云ふ。已上の三種は外緣に依る上の不同である。第四は外緣に依らざるも言語の發するは。情內に動ひて語外に發す。無始薫習の因に依て。任運に生起する。小兒初生の時他の訓を待たずして發する言語の如し。之を無始言說と云ふ。顯教は皆因緣隨機の法門なれば四言所說の教法とす。此四言を次の如く。法相三論天台華嚴の。四家大乘に配當して見るも。古德の一義にして其義相當すれども。今は相傳の義に依り。四言各々四家大乘に通じて見ると心得べし。如義語は如は稱可の義にして。法性の實義に相應する言語なるを云ふ。眞言密教は皆此如義語の所說なりと知るべし言ふ所の眞言陀羅尼は。一字含千理の故に。此法に依て。如說に信修すれば。上は卽身成佛より。下は世間の悉地に至るまで。願として滿ぜずと云ふなし

陀羅尼とは。梵語此に總持と翻ず。總持は總攝任持の義にして。陀羅尼の文字は一々に法界無盡の諸法を總攝し。過於恒沙の功德を任持するを云ふ。是を以て祕藏記には。所以陀羅尼名總持者。一字中含藏一切法文と述玉へり。一字含千理の故にとは眞言陀羅尼は一字攝多の故に。一字一字に無量無邊の義理を含めり。故に如說に信修する時は。上は往生成佛より。下は世間の利益に至るまで。滿足せずと云ふとなしとの意である

今我等かかる尊き。甚深祕密の教法に値遇し奉る。宿因の深きとを歡び。眞言念誦相續すれば。二世の勝益空しからずと。深く信ずべきなり

世間出世の諸願滿足せずと云ふとなしとある。尊き難値難聞の

法門に値遇したる宿世の因緣深きことを歡び諦信決定して眞言を念誦する時は往生の正因成佛の直因となるのみならず教力の勝能によつて業障を消滅するゆゑに現世安穩の利益を得るかく現當二世の勝益空しからずと深く信じて怠りなく念誦相續致すべしとの御教示である

五箇の條目

十善は是れ人道の常法佛法の通義なり緇素共に護持すべし

密宗安心教示章第十八正御影供章の中に後に列ぬる五箇の條目をも堅く相守りと教示し玉ふ所の條目にして密宗の教意を奉ずる道俗男女は俱に守るべき條々なれば已下畧して其意を述ぶ就中此は第一の條目である十善とは不殺生不偸盜不邪婬不妄語不綺語不惡口不兩舌不慳貪不瞋恚不邪見を云ふ此十善は龍樹菩薩の仰せに有佛無佛常有世間の戒とあれば佛の出世にもあれ佛の未だ出世し玉はざる已前にもあれ又在家にもあれ出家にもあれ凡そ人間界へ生を受得たる者は上下貴賤の差別なく必ず持つべき戒なれば是を根本性戒と云ふ故に高祖大師は顯密の諸戒皆十善を本とすと仰せられたり人能く一善を行ずれば則一惡を去り一惡を去れば則一刑を息む一刑家に息めば萬刑國に息むの道理なれば治國の要具此十善に過たるはなし鎭護國家を本とし白淨信心を旨とする眞俗二諦相依相成の密宗の教意なれば其教意を奉ずる者の持つべきは本よりのことなれば最初に此一條を示されたり常法と云ふは規則と云ふに同じ通義と云ふは通論と云ふが如し十善は人の人たる道にして人道の規則佛法の通論であるとの御教示である緇素とは印度にては僧は緇衣を着し俗は白衣を着するゆゑに僧俗のと

を緇素と云ふ。依て緇素俱に護持すべしとは。出家在家俱に護持すべしと云ふ文の相なれども。意は出家も在家も男も女も。俱に護て堅く持つべしとの示しである

三寶尊崇を旨とし。異教非義の道に。親近すべからず

此は第二の條目である。三寶とは。佛法僧を云ひ。此佛法僧は衆生轉迷の寶なるゆゑに寶と云ふ。尊崇とは。尊は尊重崇は崇敬にして。佛法僧の三寶を心にも尊重し。形にも崇敬するを。本旨とせよとの仰せである。異教非義の道に親近すべからずとは。日本の國體に害のある宗教には。決して近くべからずとの意である。三寶を尊崇する三歸戒と云ふは。邪を破し正に歸し以て佛道に入るの根本なれば。顯密の両經異なれども。三歸を以て入道の基とするとは毫も替るとなし。依て三歸の功德を說玉ふ經多し。正法念經には。受三歸者不墮三惡道と說き玉ひ。木槵子經の中には。佛の萬德圓滿清淨の功德を憶念して歸依佛と唱へ。法の出離解脫の功德を憶念して歸依法と唱へ。僧の和合福田の功德を憶念して歸依僧と唱へ。一唱して一顆を過し乃至百萬遍を滿ずるとき。凡夫地を離れて初果を證ずとある。是れは三歸を口に唱ふる功德なり。されば三歸を受持するものは。三惡道に墮せずして。人天有漏の福報を得るのみならず。常に三寶に遇て。終に生死を解脫するに至るゆゑ。至心に尊崇すべしとの意である

四恩報報を專らとし。修身齊家の道。怠るべからず

此は第三の條目である。四恩とは。國王の恩。父母の恩。三寶の恩。衆生の恩を云ふ。四恩は心地觀經に。一切衆生平等に荷負すと說き玉ふてあれば。必ず報謝いたさねばならぬ。報謝とは報恩謝德を云ふ。恩を受けて恩を知らざる者は。禽獸よりも甚しと。龍樹菩薩も仰せられてあれば。四恩の廣大なるとを憶念し。報恩謝德を專

一にし謙りて奢らず孜々として各自の職業を勤め修身齊家の道には懈怠すべからずとの示しである

難思議の法を誤解して邪見に墮せざるよう因果應報の眞理を深く信ずべし

此は第四の條目である難思議の法を誤解して殺生偷盗邪婬妄語の四重禁を犯せし者は斷頭罪にして いかに懺悔すとも罪障消滅せざるゆゑに成佛するとなしと云ふが法相宗三輪宗等の權大乘の教である然るに吾祕密甚深の教法は教力殊勝なるゆゑに四重八重五無間罪謗方等經一闡提の如き者といへども至心に懺悔する時は罪障消滅して成佛することを得と六波羅密經に說き玉へり かく說き玉ふてあるは既に造作し畢たる已造の惡業に付てのことにて決して未だ造作せざる所の未造の惡業に付て說き玉ひしに非ず若之を謬て未造の惡業に付てのと解釋すれば國家の政道を妨げ大に佛意に違す依て此道理を誤解せぬよう且邪見に墮せざるようとの意である邪見とは邪は正に對する辭にして よこしまにひがみたると見はみると云ふ字なれども ここは目でみるではなし心に見定る所あるを云ふ此見所がよこ道へ往たるを邪見と云ふ此邪見の怖るべきを知て正知見に隨順すべしとの意を含めり因果應報の眞理を深く信ずべしとは惡因によつて惡果を感じ善因によつて善果を感ずると云ふ眞理を深信すべしとの意である此理を了知し易き爲めに譬喩を且く柿の木に假て述れば花の咲は因にして次第に增長し菓を結ぶを果と名く然るを此木を割りて子細に尋ねて看ても其花は終に不可得なり又此花を裂て子細に尋ねて看ても其菓は終に不可得なり唯この木あるによつて花を開き花あるに依て菓を生ず菓あるに依て次第に熟す唯因果のみあ

つて。更に別に柿の實體あるとなし。人間界も亦然り。初め三歸十善を受持し。佛法僧の恭敬禮事すべきを知る。之を正く人間に生ずる因となす。前生に此因ありて。必ず人間一期の色心を受く。之を果と名く。是の如く因に依て果を生じ。果また因となり更に未來の果を生じ。展轉止むとなし。此因果應報の眞理は。天然の性德にして。佛天人修羅の造作に非るゆゑに。幾萬歲を經るといへども。毫釐も違ふとなし。されば此眞理を深く信じて。忠孝仁義の人道を全ふして。今世後世を謬るべからずとの意である

宗意安心は。往生成佛の大要なり。平生に決定して。二世の勝益を全くすべし

此は第五の條目である。宗意とは。心佛衆生是三無差別なれば。凡聖不二にして同一醎味なりと。體達するを云ふ。安心とは。安は安住の義にして。心を居るを云ふ。其心の居よふに。三摩地に居ると。三摩耶に居るとの差別あれども。共に梵語にして。三摩地は此に翻じて等持と云ふ。等持は等く持つと云ふ義にして。佛の心に等く持つ。生佛一如の觀に心を居て。一生に成佛を期するを。上根の安心と云ふ。三摩耶は四義あれども。一義には本誓と翻ず。佛の本誓に心を居。誦呪の功力によつて。順次往生を期するを。下根の安心と云ふ。往生成佛の大要ないばとは。上の宗意安心は。下根劣慧の人が往生し。上根勝慧の人が成佛する所の大綱要領であるとの意を云ふ。平生に決定して。二世の勝益を全くすべしとは。平生に臨終を忘れず。平生即臨終と心得て。善知識の教誘により。宗意安心を常平生に決定して。現當二世の勝益を蒙ることを。深信すべしとの意である

右教示する。廿一章の旨趣。幷に五箇の條目を。熟得し。宗意安心の大義を謬らず。王法佛法の制禁に背かざるやう。深く注意し。一期の間

信心相續。肝要なる者なり

明治十七年三月二十一日　　大教正茲蔭榮嚴

此は高祖大師。一千五十年の御遠忌に際し。別所榮嚴大僧正は。報恩謝德の爲めに。明治十七年三月二十一日の曉天に。高祖大師の御廟前に於て。當書を御撰述遊ばされ。結語に至て。密宗の教意を奉ずる者は。道俗男女共に。上に教示する二十一章と。五箇の條目とを。堅く相守りて。王法佛法の制禁に背かざるよう。注意の上に注意を加へ。信は道元功德の母なれば。一期の間白淨信心の相續怠るべからずとの。誠に懇切なる御教諭である。依て前長者三條西乘禪大僧正は。深く此安心教示章を贊賞遊ばされ。明治十九年六月十日。甲第二十三號の宗達を以て。宗內一般へ(密宗安心教示章は。大僧正別所榮嚴師の著述にして。余の贊賞せし所。即ち章を別つ二十一にして。條を設くる五目なり。而して其撰たる上下の機を攝し。順逆の徒を諭し。懇篤の教化實に盡たりと云ふべし。依ては自今以後。何れの寺院及教會に於ても。此教示章を龜鏡とし。以て布教の效を奏すべし。既に宗制第七十四條に於て。說教の作すべきを寺法とし。又第十章の懲誡に於ては。寺法條規に違背するものは住職の點免を沙汰し。及教理に違して說教を作す者は。懺悔清行の例を示す。夫れ布教の忽るかせにすべからずして。宗意布衍には布教を最とするは。今更余が言を俟たずして明了なり。而して若し布教其要を失する時は。數多の信徒を誤らしむるを如何せん。されば本宗僧侶の布教上に必須は勿論。信徒末々の輩も。此教示章の旨を體し。本宗の安心誤解無之樣。平生屹度信受致し置べく。此段特に及布達候事)と御諭示在せられたり。之を以て密宗安心教示章は。本宗の布教上には能所說聽共に必需の書籍なるを了知すべし

明治二十八年五月三十日印刷
明治二十八年六月七日發行
（定價金貳拾五錢）

版權所有

著作兼發行者　和歌山縣平民　服部鍛海
和歌山縣紀伊國那賀郡上岩出村大字野上野七十八番地

印刷者　京都府平民　山本廣三
京都市下京區五條通西洞院東入西錺屋町六番戸

眞言宗法務所藏版

（印刷所　京都市五條通西洞院東入　山本明盛堂）